



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

# ファカルティ・ディベロップメント 報告書 2014

2015年3月

教育学習支援チーム

## はじめに

福井県立大学では、経済学部、生物資源学部、海洋生物資源学部、看護福祉学部、学術教養センター、キャリアセンターと多様な部局が学生の教育に取り組んでいますので、教育の内容もその進め方も多様です。教育・学生支援チームは、昨年度から本来のFDとは何を指すべきか？そのためにはどうすればいいのかということについて、随分と前向きな議論ができたと思っています。その結果、授業評価実施要項が策定され、平成26年度から要項に基づいて授業評価を実施することとなりました。

授業評価は基本的にオムニバス授業や実験実習、演習科目などを除いてすべての授業を対象に進められ、その結果を部局長および学習支援チーム委員が閲覧し、必要であれば授業改善のための話し合いの場を設けることになっています。また、評価結果を専任教員のみではあるが学内LANで感想などの記載内容を除いてすべて公開することになりました。

FD活動の重要な柱の一つである授業公開や授業改善のための情報交換に関しては、部局によって教育現場の事情も異なることから、それぞれの部局が工夫しながら最良と考える方法で取り組んでいます。

また、今年度はF・レックスのFD研修幹事校を担当したことから、本学のチーム教員と他大学の参加者との間で、FDの実情や進め方に関して多大な情報交換ができました。これまでより多様な側面で配慮を必要とする学生が増加していることから、教員側もよりの確な対応を迫られています。その意味では、この研修会の成果を踏まえて本学でもエビデンスに基づく教学IRの必要性が認識されたことは極めて重要で、教学IRに関するワーキンググループが発足しようとしています。

第2期中期計画では、学生たちの学力下支えのための補講や、就学サポート体制の整備についての予算が確保され対策も実施しています。今年度は、上記のように本学のFD活動をさらに進化させるために、様々な取り組みが積み重ねられてきました。もちろん更なる検討を続けなければいけない課題も残っています。

学生の成長していく姿を目の当たりにするのは、教員として何物にも代えがたい喜びでありますが、教員が自分の姿を客観的にみて、教育方法の改善を進めることは極めて難しいことです。そのために様々な情報が取りまとめられたこの報告書を活用していただければと思います。

また、最後になりましたが、本年度1年間の積極的なFD活動への献身と、本報告書を取りまとめるにあたってご尽力いただいたチームリーダーの新宮 晋先生はじめ各部局のチーム員および事務局の方々の多大な努力に深謝します。

2015年3月

教育学習支援チーム代表 青海 忠久

# 目 次

はじめに	i
1.活動概要	1
1.1 委員の構成	1
1.2 事業の実施状況	1
1.2.1 授業評価	1
1.2.2 授業公開	13
1.2.3 FD 研修	13
2.各部局のFD活動	19
2.1 経済学部	19
2.1.1 授業評価	19
2.1.2 授業公開	19
2.1.3 部局内FD研修	25
2.1.4 授業改善についての課題と展望	26
2.2 生物資源学部	27
2.2.1 授業評価	27
2.2.2 授業公開	27
2.2.3 授業改善の取り組み	28
2.2.4 授業改善についての課題と展望	32
2.3 海洋生物資源学部	33
2.3.1 授業評価	33
2.3.2 授業公開	33
2.3.3 部局内FD研修	38
2.3.4 授業改善についての課題と展望	39
2.4 看護福祉学部	40
2.4.1 授業評価	40
2.4.2 授業公開	41
2.4.3 授業改善の取り組み	41
2.4.4 FD研修	44
2.4.5 授業改善についての課題と展望	47
2.5 学術教養センター	48
2.5.1 授業評価	48
2.5.2 授業公開	49
2.5.3 部局内FD研修	51
2.5.4 授業改善についての課題と展望	54
3.点検と課題	62
3.1 授業評価	62
3.2 授業公開	63
3.3 研 修	63
3.4 そ の 他	63
おわりに	64

# 1. 活動概要

## 1.1 委員の構成

チームの規定(規定第12号)により教育担当理事をチーム長とし、メンバーを理事が選考する。2014年度のメンバーは、以下の12名の教員と5名の職員である。

2014年度チーム委員名簿

氏名	所属	職	役割
青海 忠久	理事(教育担当)	副学長〈教育〉	チーム長
新宮 晋	経済学部	准教授	チームリーダー
杉山 泰之	経済学部	准教授	委員
松岡 由浩	生物資源学部	准教授	委員
伊藤 貴文	生物資源学部	准教授	委員
富永 修	海洋生物資源学部	教授	委員
松川 雅仁	海洋生物資源学部	准教授	委員
吉弘 淳一	看護福祉学部	准教授	委員
平井 一芳	看護福祉学部	准教授	委員
木村 小夜	学術教養センター	教授	委員
山川 修	学術教養センター	教授	委員
加藤 まどか	学術教養センター	准教授	委員
坂口 卓夫	教育・学生支援部	教育・学生支援部長	事務局
山崎 英雄	教育推進課	課長代理	事務局
大野 史博	情報ネットワーク管理室	室長代理	事務局
芝原 靖之	企画サービス室(小浜C)	主任	事務局(小浜C)
竹原 亜希子	教育推進課	主任	事務局(福井C)

## 1.2 事業の実施状況

### 1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果を次頁より順に掲載する。実施概要を2013年度のそれと比較すると、前期の学部の参加科目が291科目から305科目に増加(内訳は経済学部1科目増、生物資源学部2科目増、海洋資源学部1科目増、看護福祉学部3科目減、学術教養センター13科目増、キャリア教育科目増減なし)し、後期は271科目から296科目に増加(内訳は経済学部12科目増、生物資源学部4科目増、海洋資源学部1科目増、看護福祉学部2科目減、学術教養センター10科目増)した。

## 福井県立大学学生による授業評価実施要項

平成26年4月1日

### 1 目的

学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。

### 2 対象教員

専任教員および非常勤講師

### 3 対象学生

学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生

### 4 対象授業

(1) から (3) を除く授業科目

ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。

(1) オムニバス授業

(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科

(3) 実施期間終了後の集中講義

### 5 期間

前期科目： 前期補講期間前の2週間

後期科目、通年科目： 後期補講期間前の2週間

集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。

### 6 方法

アンケート用紙にて実施する。

ただし、事前の申請により、LMSにて実施することができる。

### 7 項目

評価は、下記項目について実施する。

(1) から (5) については、4段階評価とし、(6) については、自由記述とする。

ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

(1) 受講の意欲

(2) 授業方法

(3) 内容の理解

(4) 関心

(5) 総合評価

(6) 感想等

### 8 評価結果の取扱い

評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびLMS実施データとともに部局長および教育学習支援チーム委員の閲覧に供する。部局長は教育学習支援チーム委員とともに、必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。

評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。

### 9 評価結果の公開

(1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内LAN内のウェブページにて公開する。

ただし、7（6）感想等の記載内容については、公開しない。

評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。

(2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内LAN内のウェブページにて公開する。

## 平成26年度前期 学生による授業評価の実施結果

### ★実施期間

平成26年7月7日(月)～7月17日(木)

### ★調査票配布・回収状況

<学部>	回収数	配布数
経済学部	2,111 枚	4,650 枚
生物資源学部	747 枚	999 枚
海洋生物資源学部	871 枚	1,152 枚
看護福祉学部	1,311 枚	1,556 枚
学術教養センター	4,780 枚	7,580 枚
キャリアセンター	9 枚	12 枚
計	9,829 枚	15,949 枚

<大学院>	回収数	配布数
経済・経営学研究科	44 枚	66 枚
生物資源学研究科	39 枚	64 枚
看護福祉学研究科	18 枚	35 枚
計	101 枚	165 枚

### ★参加教員

<学部>	人数	割合
経済学部	25 人	96.2%
生物資源学部	15 人	88.2%
海洋生物資源学部	15 人	93.8%
看護福祉学部	29 人	93.5%
学術教養センター	24 人	96.0%
キャリアセンター他	6 人	100.0%
非常勤講師	57 人	91.9%
計	171 人	93.4%

<大学院>	人数	割合
経済・経営学研究科	7 人	77.8%
生物資源学研究科	5 人	100.0%
看護福祉学研究科	3 人	30.0%
非常勤講師	3 人	100.0%
計	18 人	66.7%

### ★参加科目

<学部>	科目数	割合
経済学部	49 科目	81.7%
生物資源学部	22 科目	95.7%
海洋生物資源学部	24 科目	92.3%
看護福祉学部	44 科目	86.3%
学術教養センター	165 科目	84.6%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	305 科目	85.7%

<大学院>	科目数	割合
経済・経営学研究科	9 科目	75.0%
生物資源学研究科	5 科目	83.3%
看護福祉学研究科	5 科目	33.3%
計	19 科目	57.6%

## 平成26年度後期 学生による授業評価の実施結果

### ★実施期間

平成27年1月8日(木)～1月21日(水)

### ★調査票配布・回収状況

<学部>	回収数	配布数
経済学部	1,965 枚	4,057 枚
生物資源学部	434 枚	651 枚
海洋生物資源学部	579 枚	867 枚
看護福祉学部	1,313 枚	1,464 枚
学術教養センター	3,528 枚	6,056 枚
計	7,819 枚	13,095 枚

<大学院>	回収数	配布数
経済・経営学研究科	34 枚	70 枚
生物資源学研究科	22 枚	71 枚
看護福祉学研究科	23 枚	34 枚
計	79 枚	175 枚

### ★参加教員

<学部>	人数	割合
経済学部	28 人	90.3%
生物資源学部	13 人	86.7%
海洋生物資源学部	16 人	100.0%
看護福祉学部	21 人	84.0%
学術教養センター	24 人	92.3%
キャリアセンター他	5 人	100.0%
非常勤講師	41 人	87.2%
計	148 人	89.7%

<大学院>	人数	割合
経済・経営学研究科	6 人	66.7%
生物資源学研究科	2 人	66.7%
看護福祉学研究科	6 人	60.0%
非常勤講師	2 人	33.3%
計	16 人	57.1%

### ★参加科目

<学部>	科目数	割合
経済学部	87 科目	82.1%
生物資源学部	17 科目	85.0%
海洋生物資源学部	20 科目	90.9%
看護福祉学部	31 科目	77.5%
学術教養センター	141 科目	83.9%
計	296 科目	83.1%

<大学院>	科目数	割合
経済・経営学研究科	9 科目	50.0%
生物資源学研究科	2 科目	40.0%
看護福祉学研究科	7 科目	63.6%
計	18 科目	52.9%



# 福井県立大学 授業に関する調査

## 質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために  
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

**回答は裏面の回答欄に記入してください。**

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述  
してください。

### 記入上の注意

- 1: 選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述  
してください。
- 2: 記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3: 訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4: 用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 (2) ... ▶ ● 悪い例 (2) ... ▶ ~~(2)~~ ~~(2)~~ ~~(2)~~



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学  
ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を  
御覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

例) 平成25年4月入学生・・・①

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

例) 平成25年4月入学生・・・⑤

**学部生** 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科  
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

**大学院生** 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻  
11: 海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

### 質問および回答欄

**Q1** この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

①意欲的に取り組まなかった ②あまり意欲的に取り組まなかった ③ある程度意欲的に取り組んだ ④意欲的に取り組んだ

① ② ③ ④

**Q2** 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

① ② ③ ④

**Q3** 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

①理解できなかった ②あまり理解できなかった ③ある程度理解できた ④理解できた

① ② ③ ④

**Q4** この授業の分野への関心は高まりましたか?

①高まらなかった ②あまり高まらなかった ③少し高まった ④高まった

① ② ③ ④

**Q5** この授業を総合的に評価してください。

①良くない ②あまり良くない ③まずまず良い ④良い

① ② ③ ④

**Q6** 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します。

**Q6**の自由記述欄

**Q7** 教員設定の質問(別紙参照)

① ② ③ ④

**Q8** 教員設定の質問(別紙参照)

**Q8**の自由記述欄

## 全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。以下に、集計結果の見方を記す。

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応 設問のキーワードを記すが、詳細は 18 頁を参照
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「1, 2, 3, 4」をそれぞれ「1 点, 2 点, 3 点, 4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず。「—」の欄は有効回答が無かったことを示す。

### [集計グループ]

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果（学部・前期）

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 9346 )	3.21	3.30	3.11	3.16	3.32
		0.71	0.71	0.74	0.80	0.68
学部学科別	( 9346 )					
経済学部	( 4433 )	3.22	3.29	3.12	3.16	3.32
		0.72	0.72	0.75	0.79	0.69
経済学科	( 2199 )	3.22	3.28	3.09	3.14	3.29
		0.71	0.73	0.77	0.82	0.71
経営学科	( 2234 )	3.22	3.31	3.15	3.17	3.34
		0.72	0.71	0.73	0.77	0.67
生物資源学部	( 1307 )	3.13	3.18	3.02	3.09	3.22
		0.73	0.73	0.75	0.82	0.71
生物資源学科	( 1307 )	3.13	3.18	3.02	3.09	3.22
		0.73	0.73	0.75	0.82	0.71
海洋生物資源学部	( 1432 )	3.08	3.21	2.97	3.00	3.23
		0.71	0.73	0.76	0.84	0.71
海洋生物資源学科	( 1432 )	3.08	3.21	2.97	3.00	3.23
		0.71	0.73	0.76	0.84	0.71
看護福祉学部	( 2172 )	3.35	3.44	3.22	3.30	3.47
		0.65	0.64	0.68	0.76	0.61
看護学科	( 1389 )	3.42	3.46	3.27	3.36	3.49
		0.64	0.65	0.68	0.74	0.61
社会福祉学科	( 783 )	3.22	3.40	3.13	3.19	3.42
		0.64	0.62	0.67	0.77	0.60
科目等履修生・聴講生	( 2 )	2.50	3.50	4.00	4.00	4.00
		1.50	0.50	0.00	0.00	0.00
入学年次別	( 9346 )					
07生	( 2 )	2.50	3.50	3.00	3.00	4.00
		0.50	0.50	0.00	0.00	0.00
08生	( 8 )	3.50	3.63	3.50	3.63	3.63
		0.50	0.48	0.50	0.48	0.48
09生	( 9 )	3.33	3.56	3.22	3.67	3.78
		0.67	0.68	0.63	0.67	0.63
10生	( 60 )	3.45	3.55	3.52	3.45	3.62
		0.62	0.56	0.59	0.67	0.58
11生	( 503 )	3.34	3.38	3.22	3.22	3.41
		0.67	0.72	0.71	0.81	0.72
12生	( 1672 )	3.25	3.37	3.17	3.25	3.39
		0.70	0.67	0.71	0.79	0.66
13生	( 2341 )	3.16	3.26	3.08	3.14	3.29
		0.72	0.73	0.75	0.81	0.70
14生	( 4751 )	3.21	3.28	3.08	3.12	3.30
		0.71	0.72	0.75	0.80	0.68
部局別	( 9346 )					
経済学部	( 1994 )	3.19	3.26	3.05	3.12	3.29
		0.71	0.74	0.77	0.80	0.71
生物資源学部	( 714 )	3.02	3.11	2.92	3.03	3.13
		0.77	0.76	0.79	0.87	0.75
海洋生物資源学部	( 825 )	3.06	3.23	2.94	2.98	3.23
		0.68	0.69	0.73	0.83	0.68
看護福祉学部	( 1247 )	3.37	3.46	3.26	3.36	3.48
		0.65	0.63	0.65	0.75	0.61
学術教養センター	( 4566 )	3.24	3.31	3.15	3.17	3.35
		0.70	0.71	0.73	0.79	0.67
規模別	( 9346 )					
100人以上	( 4589 )	3.17	3.26	3.05	3.13	3.29
		0.72	0.72	0.76	0.80	0.69
100人未満	( 4757 )	3.26	3.33	3.16	3.18	3.36
		0.69	0.70	0.72	0.80	0.67

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 7317 )	3.22 0.69	3.32 0.69	3.13 0.72	3.19 0.76	3.36 0.66
学部学科別 ( 7317 )						
経済学部	( 3589 )	3.22 0.70	3.33 0.72	3.14 0.73	3.19 0.77	3.35 0.69
経済学科	( 1781 )	3.21 0.70	3.31 0.73	3.11 0.74	3.18 0.78	3.32 0.70
経営学科	( 1808 )	3.23 0.70	3.34 0.71	3.17 0.72	3.21 0.76	3.37 0.68
生物資源学部	( 866 )	3.17 0.65	3.24 0.64	3.05 0.68	3.12 0.73	3.28 0.62
生物資源学科	( 866 )	3.17 0.65	3.24 0.64	3.05 0.68	3.12 0.73	3.28 0.62
海洋生物資源学部	( 968 )	3.04 0.70	3.21 0.70	2.96 0.74	3.01 0.83	3.25 0.69
海洋生物資源学科	( 968 )	3.04 0.70	3.21 0.70	2.96 0.74	3.01 0.83	3.25 0.69
看護福祉学部	( 1893 )	3.33 0.64	3.40 0.64	3.23 0.68	3.30 0.71	3.46 0.59
看護学科	( 1246 )	3.39 0.62	3.42 0.66	3.27 0.66	3.34 0.71	3.49 0.59
社会福祉学科	( 647 )	3.21 0.66	3.35 0.61	3.16 0.69	3.21 0.71	3.41 0.58
科目等履修生・聴講生	( 1 )	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
入学年次別 ( 7317 )						
07生	( 1 )	3.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00
08生	( 9 )	3.11 0.57	3.11 0.57	3.22 0.63	3.56 0.50	3.44 0.50
09生	( 1 )	3.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00
10生	( 29 )	3.17 0.65	3.41 0.72	3.34 0.66	3.41 0.62	3.52 0.68
11生	( 363 )	3.51 0.61	3.67 0.56	3.47 0.60	3.57 0.57	3.70 0.53
12生	( 1200 )	3.34 0.68	3.43 0.68	3.28 0.70	3.34 0.76	3.47 0.63
13生	( 2136 )	3.14 0.66	3.26 0.68	3.06 0.69	3.10 0.75	3.28 0.65
14生	( 3578 )	3.19 0.70	3.28 0.70	3.09 0.73	3.15 0.77	3.33 0.67
部局別 ( 7317 )						
経済学部	( 1841 )	3.24 0.70	3.32 0.77	3.11 0.77	3.20 0.79	3.34 0.72
生物資源学部	( 393 )	3.08 0.63	3.14 0.64	2.94 0.71	3.01 0.76	3.18 0.64
海洋生物資源学部	( 546 )	2.98 0.69	3.15 0.71	2.91 0.71	2.90 0.83	3.17 0.69
看護福祉学部	( 1216 )	3.35 0.63	3.40 0.65	3.26 0.65	3.35 0.67	3.45 0.58
学術教養センター	( 3321 )	3.21 0.69	3.34 0.66	3.16 0.70	3.18 0.75	3.38 0.64
規模別 ( 7317 )						
100人以上	( 3571 )	3.14 0.70	3.25 0.73	3.03 0.74	3.10 0.79	3.28 0.68
100人未満	( 3746 )	3.29 0.67	3.39 0.65	3.23 0.68	3.27 0.73	3.43 0.62

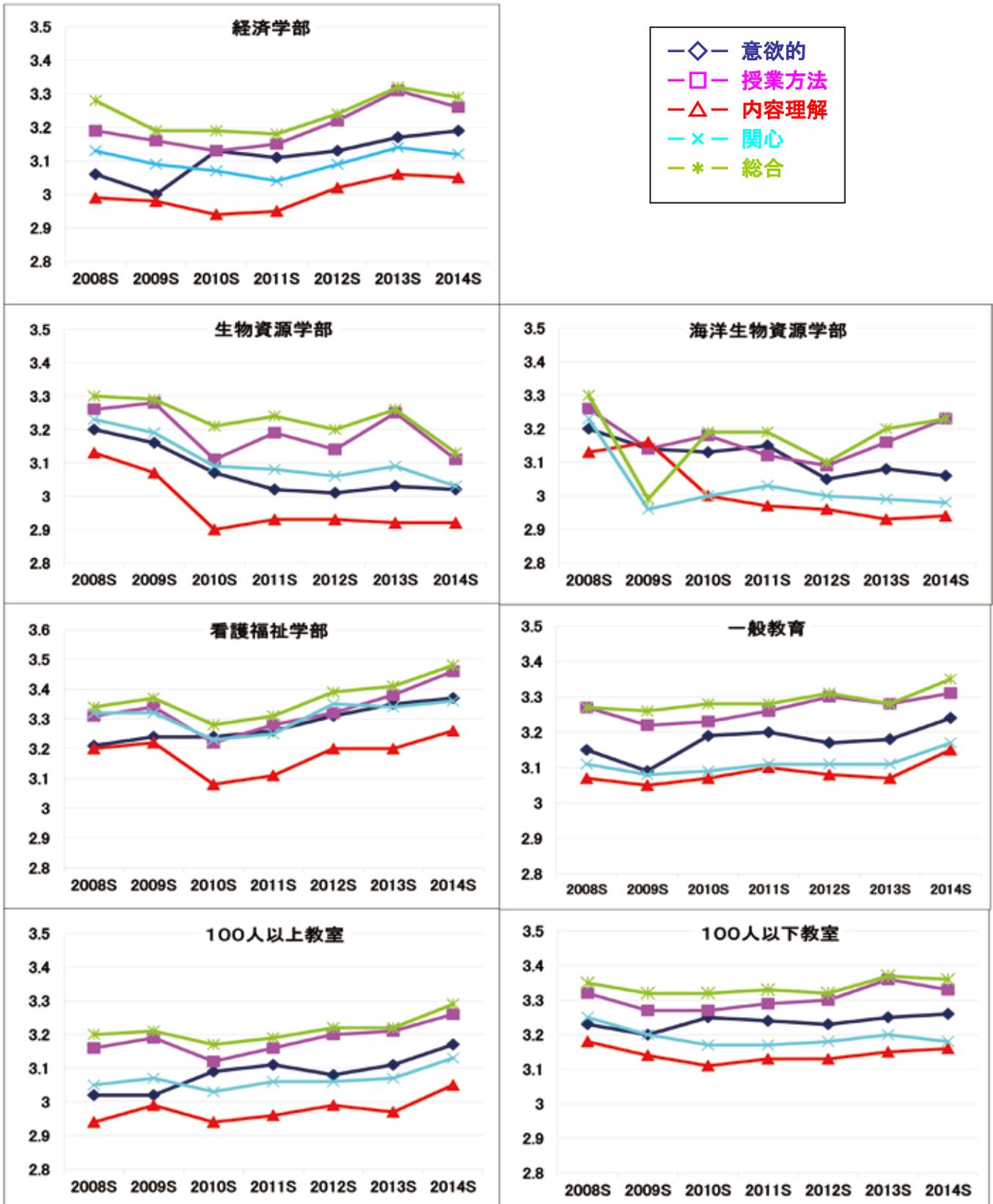
全体集計結果（大学院・前期）

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 91 )	3.57	3.55	3.21	3.49	3.60
		0.54	0.54	0.70	0.64	0.51
研究科専攻別	( 91 )					
経済・経営学研究科	( 41 )	3.73	3.56	3.29	3.49	3.63
		0.44	0.54	0.67	0.67	0.53
地域・国際経済政策専攻	( 9 )	3.89	3.89	3.56	3.78	3.89
		0.31	0.31	0.50	0.63	0.31
経営学専攻	( 32 )	3.69	3.47	3.22	3.41	3.56
		0.46	0.56	0.70	0.65	0.56
生物資源学研究科	( 33 )	3.39	3.52	3.00	3.33	3.55
		0.60	0.56	0.78	0.64	0.50
生物資源学専攻	( 25 )	3.52	3.68	3.00	3.44	3.68
		0.57	0.47	0.80	0.57	0.47
海洋生物資源学専攻	( 8 )	3.00	3.00	3.00	3.00	3.13
		0.50	0.50	0.71	0.71	0.33
看護福祉学研究科	( 17 )	3.53	3.59	3.41	3.82	3.65
		0.50	0.49	0.49	0.38	0.48
看護学専攻	( 9 )	3.44	3.56	3.44	4.00	3.56
		0.50	0.50	0.50	0.00	0.50
社会福祉学専攻	( 8 )	3.63	3.63	3.38	3.63	3.75
		0.48	0.48	0.48	0.48	0.43
科目等履修生・聴講生	( 0 )	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
入学年次別	( 91 )					
07生	( 0 )	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
08生	( 0 )	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
09生	( 0 )	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
10生	( 0 )	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
11生	( 0 )	—	—	—	—	—
		—	—	—	—	—
12生	( 3 )	3.67	3.33	2.33	3.00	3.33
		0.47	0.47	1.25	0.82	0.47
13生	( 19 )	3.63	3.53	3.16	3.58	3.68
		0.48	0.50	0.59	0.49	0.46
14生	( 69 )	3.55	3.57	3.26	3.49	3.59
		0.55	0.55	0.67	0.65	0.52
部局別	( 91 )					
経済・経営学研究科	( 40 )	3.75	3.58	3.30	3.53	3.65
		0.43	0.54	0.68	0.63	0.53
生物資源学研究科	( 34 )	3.38	3.50	3.00	3.29	3.53
		0.59	0.56	0.77	0.67	0.50
看護福祉学研究科	( 17 )	3.53	3.59	3.41	3.82	3.65
		0.50	0.49	0.49	0.38	0.48

全体集計結果（大学院・後期）

集計グループ	( 集計数 )	Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	( 75 )	3.51 0.64	3.68 0.57	3.43 0.68	3.55 0.79	3.76 0.54
研究科専攻別	( 75 )					
経済・経営学研究科	( 32 )	3.69 0.63	3.69 0.63	3.47 0.83	3.66 0.69	3.78 0.60
地域・国際経済政策専攻	( 16 )	3.81 0.39	3.69 0.46	3.75 0.43	3.69 0.58	3.88 0.33
経営学専攻	( 16 )	3.56 0.79	3.69 0.77	3.19 1.01	3.63 0.78	3.69 0.77
生物資源学研究科	( 22 )	3.09 0.60	3.45 0.58	3.23 0.52	3.36 0.77	3.55 0.58
生物資源学専攻	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
海洋生物資源学専攻	( 22 )	3.09 0.60	3.45 0.58	3.23 0.52	3.36 0.77	3.55 0.58
看護福祉学研究科	( 21 )	3.67 0.47	3.90 0.29	3.57 0.49	3.57 0.90	3.95 0.21
看護学専攻	( 7 )	3.43 0.49	3.86 0.35	3.71 0.45	3.43 1.05	3.86 0.35
社会福祉学専攻	( 14 )	3.79 0.41	3.93 0.26	3.50 0.50	3.64 0.81	4.00 0.00
科目等履修生・聴講生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別	( 75 )					
07生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
08生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
09生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
10生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
11生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
12生	( 0 )	— —	— —	— —	— —	— —
13生	( 20 )	3.50 0.59	3.65 0.48	3.45 0.59	3.70 0.56	3.75 0.43
14生	( 55 )	3.51 0.66	3.69 0.60	3.42 0.71	3.49 0.85	3.76 0.57
部局別	( 75 )					
経済・経営学研究科	( 32 )	3.69 0.63	3.69 0.63	3.47 0.83	3.66 0.69	3.78 0.60
生物資源学研究科	( 21 )	3.05 0.63	3.43 0.63	3.19 0.83	3.33 0.69	3.52 0.60
看護福祉学研究科	( 22 )	3.68 0.47	3.91 0.29	3.59 0.49	3.59 0.89	3.95 0.21

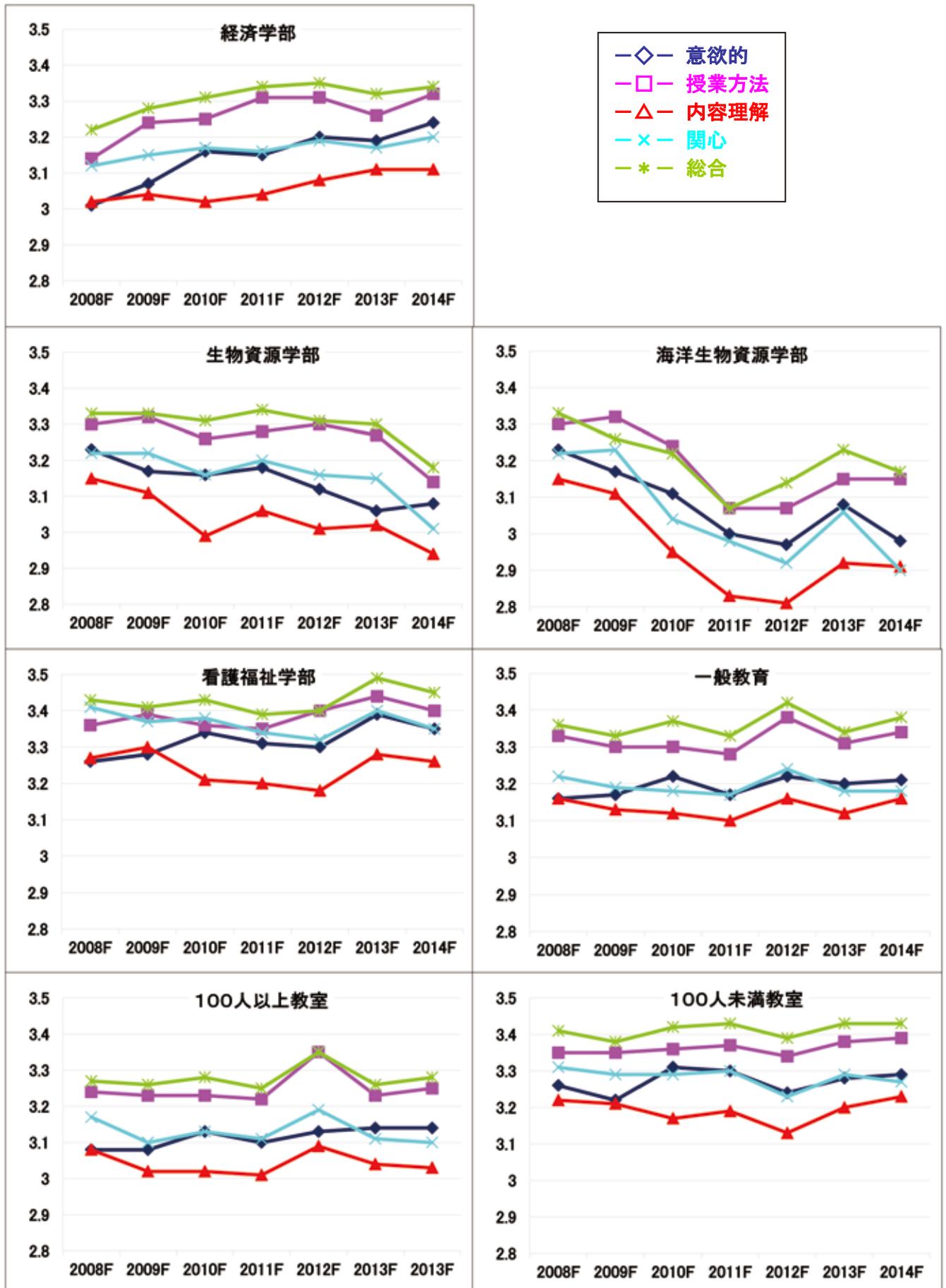
図1 重要項目の経年特性（前期）



(注)

- ・「意欲的」は学生の授業に対する意欲、「授業方法」は授業の進行方法、「内容理解」は学生の満足度や学力、「関心(が高まった)」は、教員と学生双方の努力、「総合(評価)」は授業の質、に各々関係していると考えている。
- ・軸の数値 2008S の S は春学期（前期）を、次項の F は秋学期（後期）を意味する。

図2 重要項目の経年特性（後期）



### 1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

### 1.2.3 FD研修

全体研修のみ示す。それぞれの詳細および各部局で行った研修は、2章「各部局のFD活動」にて報告する。

参加イベント・日程・会場	参加者																																
第4回北陸地区大学・短大「連携FD」研修会 平成26年6月28日（土） 響のホール	看護福祉学部 澤田敏子 講師																																
Fレックス第5回FD合宿研修会 平成26年9月4日（木）～9月5日（金） 福井県立大学	<table border="0"> <tr> <td>理事（教育担当）</td> <td>青海忠久 副学長</td> </tr> <tr> <td>経済学部</td> <td>新宮 晋 准教授</td> </tr> <tr> <td>経済学部</td> <td>杉山泰之 准教授</td> </tr> <tr> <td>海洋生物資源学部</td> <td>宮台俊明 教授</td> </tr> <tr> <td>海洋生物資源学部</td> <td>富永 修 教授</td> </tr> <tr> <td>看護福祉学部</td> <td>有田広美 准教授</td> </tr> <tr> <td>看護福祉学部</td> <td>平井一芳 准教授</td> </tr> <tr> <td>看護福祉学部</td> <td>普照早苗 准教授</td> </tr> <tr> <td>看護福祉学部</td> <td>澤田敏子 講師</td> </tr> <tr> <td>看護福祉学部</td> <td>梶 瑞紀 助手</td> </tr> <tr> <td>学術教養センター</td> <td>木村小夜 教授</td> </tr> <tr> <td>学術教養センター</td> <td>中村 匡 教授</td> </tr> <tr> <td>学術教養センター</td> <td>山川 修 教授</td> </tr> <tr> <td>学術教養センター</td> <td>熊谷 正 講師</td> </tr> <tr> <td>学術教養センター</td> <td>徳野淳子 講師</td> </tr> <tr> <td>学術教養センター</td> <td>松本 涼 講師</td> </tr> </table>	理事（教育担当）	青海忠久 副学長	経済学部	新宮 晋 准教授	経済学部	杉山泰之 准教授	海洋生物資源学部	宮台俊明 教授	海洋生物資源学部	富永 修 教授	看護福祉学部	有田広美 准教授	看護福祉学部	平井一芳 准教授	看護福祉学部	普照早苗 准教授	看護福祉学部	澤田敏子 講師	看護福祉学部	梶 瑞紀 助手	学術教養センター	木村小夜 教授	学術教養センター	中村 匡 教授	学術教養センター	山川 修 教授	学術教養センター	熊谷 正 講師	学術教養センター	徳野淳子 講師	学術教養センター	松本 涼 講師
理事（教育担当）	青海忠久 副学長																																
経済学部	新宮 晋 准教授																																
経済学部	杉山泰之 准教授																																
海洋生物資源学部	宮台俊明 教授																																
海洋生物資源学部	富永 修 教授																																
看護福祉学部	有田広美 准教授																																
看護福祉学部	平井一芳 准教授																																
看護福祉学部	普照早苗 准教授																																
看護福祉学部	澤田敏子 講師																																
看護福祉学部	梶 瑞紀 助手																																
学術教養センター	木村小夜 教授																																
学術教養センター	中村 匡 教授																																
学術教養センター	山川 修 教授																																
学術教養センター	熊谷 正 講師																																
学術教養センター	徳野淳子 講師																																
学術教養センター	松本 涼 講師																																

## 第5回F レックス合宿研修会

(以下のまとめは、F レックス DE チーム代表の福井工業大学 杉原一臣氏による)

FD 合宿研修会が9月4日と5日の2日間にわたって、福井県立大学福井キャンパスにて開催されました。参加者数は34名で、その内宿泊者数は15名で、内訳は次の通りでした。

所属	参加者(宿泊者)
福井県立大学	16(4)名
福井工業大学	3(1)名
仁愛大学	6(3)名
仁愛女子短期大学	4(2)名
福井工業高等専門学校	4(3)名
福井大学	1(0)名

以下に、プログラムと概要を示します。

### \*F レックス第5回FD 合宿研修会\*

【主旨】F レックス参加校共同のFD 活動として、参加教職員のスキルアップを図るための合宿研修を行う。合わせて、福井県内高等教育機関の教職員の交流を促進する。

【日時】2014年9月4日(木)～9月5日(金)

【会場】福井県立大学共通講義棟 L111 室(4日)  
情報演習室(5日)

〒910-1195 福井県吉田郡永平寺町松岡兼定島

Tel. 0776-61-6000

【宿泊】リライム

〒910-0842 福井県福井市開発5丁目1207

Tel. 0776-52-5400

【日程】1日目

時刻	内容
13:00	開講式
～13:15	司会:杉原 一臣(工大) 挨拶:山川 修(F レックス会長・県大)
13:15	講演 1「大学教育の質保証に向けた教学

～14:15	IR の開発-RQ に基づくモニタリングー」 鳥居 朋子 氏(立命館大学)
	休憩
14:30 ～15:10	講演2「F レックスにおける教学 IR の取 り組み」徳野 淳子 氏(県大)
	休憩
15:25 ～17:20	ワークショップ「RQ づくりから始める大 学教育改善」河合 亨 先生(県大)
	リライム移動
18:30 ～20:30	意見交換会



開講式



会長挨拶



講演1



講演 2



スキルアップ講座 (その1)



ワークショップ (その1)



スキルアップ講座 (その2)

【日程】2日目

時刻	内容
9:00	スキルアップ講座
～9:05	司会：江本 晃美 (高専)
9:05	LMS (Moodle) 活用方法紹介
～11:40	田中 洋一 氏 (仁短) 富永 修 氏 (県大) 加藤 優子 氏 (仁大)
11:40	閉講式
～11:50	司会：内藤 徹 (仁短) 挨拶：坪川 武弘 (Fレックス副会長・高専)
12:00	散会



スキルアップ講座 (その3)



スキルアップ講座 (その4)



閉講式後

参加費 15,000 円 (宿泊費含む)

※申し込み先は、各参加校のFD チームメンバー

\*\*\*\*\*

### 第5回FD合宿研修会 (簡易まとめ)

#### 1 日目 「教学 IR」 (司会：杉原 一臣)

「教学 IR」をテーマに、2 件の講演と 1 件のワークショップが行われた。

鳥居朋子氏 (立命館大学・教育開発推進機構) は、大学教員の質保証にかかる日本の制度や政策状況について概説した後、大学教育の質保証における「教学 IR」の役割、つまり、教育改善に向けた意思決定を支えるために IR が必要であることを述べた。また、IR を機能させるには、大学の目標や計画に沿った現状把握、具体的には、「調査のための問い (RQ: Research Question)」が不可欠であることを強調した。鳥居氏は、アメリカにおける RQ の事例の他に、立命館大学における教学 IR の体制や RQ の取り組みに触れ、現場の事情に合わせた提案を進める上で、様々な視点からの学生調査の可能性を示した。鳥居氏の講演を通じ、教育現場において、エビデンス重視の取り組みを展開することで、印象や経験のみに頼る意思決定から抜け出すことの重要性を改めて認識した。

徳野淳子氏 (県大) は、F レックスの「教学 IR」において、参加校が共同で実施している学生意識調査アンケートの分析を通じて、参加校全体における学生の特徴を捉える活動に携わっている。今回の講演は、F レックスにおける教学 IR の背景と最近の分析結果に関する報告が中心であった。F レックスの教学 IR のワーキンググループでは、京都大学の溝上慎

一先生が開発したアンケート項目に、学生の実態をよりの確に捉えるための改良を加えつつ、アンケートを実施している。徳野氏からは、最近の成果として、2013 年度のデータにおいて、学生の特徴が「自主学习重視型」、「科目履修重視型」、「アルバイト重視型」、「協調型」、「無特徴型」の 5 つのタイプに分かれることと、学年別・参加校別で 5 つのタイプの比率に統計的な有意差があること、分析結果を各参加校にフィードバックしていることなどが紹介された。

河井亨氏 (立命館大学・教育開発推進機構) からは、鳥居氏の講演で触れられた「RQ」の実践指導を受けた。IR の流れを確認した後、「良い RQ」については、実習を交えた説明が行われた。IR の流れについては、「Design (計画立案)」、「Collect (データ収集)」、「Analyze (データ分析)」、「Report (結果報告)」の過程があり、これらの 1 つでも不備があると、IR は成果を生まないことが述べられた。また、「良い RQ」のために、「Design (計画立案)」では「Collect (データ収集)」、「Analyze (データ分析)」、「Report (結果報告)」の 3 つを見据えた計画を立てること、「Collect (データ収集)」においては回収率を高めること、「Analyze (データ分析)」における正確かつ的確なデータ処理、「Report (結果報告)」でのグラフや表の見やすさや結果の意外性などを意識して、実践することの必要性が強調された。さらに、河井氏は、IR の評価基準として「FIRMNESS」を掲げた。

「FIRMNESS」は、「Feasible (実施可能性)」、「Interesting, Relevant (興味深さ, 切実性)」、「Measureable (測定可能性)」、「Novel (新奇性)」、「Ethical (倫理性)」、「Structured, Specific (構造化, 明確性)」の頭文字をとったキーワードである。その後、RQ に関するグループ作業が、「キーワードを選ぶ」、「RQ を導き出す」、「必要なデータを考える」、「RQ を評価する」、「共有する」の順に進められ、3 ~4 人のグループごとに、その成果が発表された。その成果 (各グループから出た RQ) を示す。

「人間力形成に何が (他人の意見等) 関わったか？」

「AL を受けた経験があるか？実践しているか？」

「PBL・体験型学習が学習意欲を高めたか？」

「授業で自発的発言が少ないのはなぜか？」  
「興味関心が成果につながるのか？」  
「知識重視型学生は学習意欲は高いのか？」  
「学習意欲・自律性を高めるにはどうしたら良いか？」

## 2日目 「LMS 活用事例」 (司会：江本晃美)

「F レックスにおける LMS の実践」をテーマに、3 件の事例報告があった。

F レックス学習チームのリーダーである田中洋一氏 (仁短) は、早い段階から F レックスに関わっていて、LMS (Moodle) や SNS (OpenSNP)、e-portfolio (Mahara) 等のシステムを授業で活用している。今回は、自身の担当授業の事例を交えて、LMS における教材と学習状況の管理方法を紹介した。また、他のシステムとの連携の1つとして、e-portfolio における成果物等の共有方法にも触れ、システムの使い分けにより、より柔軟な授業設計が可能であることを述べた。

富永修氏 (県大) は、所属する海洋生物資源学部における活用事例を紹介した。自身のコンピュータとの関わりに触れつつ、苦労話を交えて、基礎科目や専門科目における活用方法 (資料配布・レポート回収・コミュニケーション等) を述べた。特に、講義資料の配布において、学生に配慮した対応が不評であったことなどに触れ、効率性を重視しすぎて、教員側の都合に偏重した使用は逆効果となることを指摘した。アンケートでも述べられていたが、富永氏の報告は、LMS 利用経験の浅い教員にとって、その活用を促す良い刺激となった。

加藤優子氏 (仁大) からは、異文化コミュニケーションの取り組みにおける LMS の活用事例が紹介された。異文化コミュニケーション実践のためのトレーニングを目的として、LMS 上で、関連授業における課題提示から学生の知識習得・気付きに至るまでのプロセスをどのように実現したのかを説明し、成績やアンケートの結果を踏まえて、これまでの取り組みを振り返った。多様な気付きを創発するための加藤氏の活用は大変参考になった。また、紹介の中で、ファシリテーターとしての教員の留意すべき点とし

て、対面でのコミュニケーションの重要性を強く実感した。

\*\*\*\*\*  
参加者のこの研修会に関するアンケート結果を少し紹介します。

### 設問 A. 「今回の合宿研修会の満足度」

「大変満足」：13 名 (81.25%)

「やや満足」：3 名 (18.75%)

「やや不満」：0 名 (0.00%)

「大変不満」：0 名 (0.00%)

※カッコ内は有効回答数に対する選択率

### 設問 B. 「セッションごとの感想」

#### (1) 「大学教育の質保証に向けた教学 IR の開発—RQ に基づくモニタリング—」 (鳥居朋子氏)

- ・ IR の体系的な内容を聞いたこと、立命館大学での実際の例を基に示してもらえたことは参考になった。
- ・初めて聞く用語があり、まだ漠然という感想です。
- ・今回、全て初めて聞く内容であったので、大変勉強になりました。立命館大学のように規模の大きな大学では本学と違う調査の困難さがあると思いました。本学の小規模な中でも、取り組めることがあれば、今後、検討していきたいと思います。
- ・PDCA が実動していることが大変印象的でした。
- ・教員側との協力関係が良好な点も印象的でした。
- ・授業評価アンケート等の項目の検討を自身が考えていることもあり、非常に参考になりました。

#### (2) 「F レックスにおける教学 IR の取り組み」

(徳野淳子氏)

- ・本学は、この調査分析に直接関与していないので、他大学で得られた結果は非常に参考になった。
- ・学生意識調査がより有効に教育改革につなげれば良いと思います。
- ・学生タイプの違いを把握することは、学生とのコミュニケーションの際に有効だと思いました。
- ・学生タイプの違いを把握することは、学生とのコミュニケーションの際に有効だと思いました。

- ・実際の学生のアンケートに基づく分析の実態が良く理解できました。今後も、継続して調査を行い、経年変化を捉えられたらと思います。
- ・大学によって、予想以上に学生のタイプがはっきり、異なることが印象的でした。

### (3) 「RQづくりから始める大学教育改善」

(河合亨氏)

- ・思った以上に、考えをまとめるのが難しく、時間が足りなかった。しかしながら、多くの考えを4名で巡らせることができたことは有意義であった。
- ・2回目の参加だが、グループのメンバーにより、議論内容が変わり、面白かったです。
- ・実際に、RQをつくる上での重要な視点を気付かせていただきました。
- ・RQを作る過程でエビデンスベースに自分の授業改善に結びつくのではないかと。
- ・種々のアンケートを扱っているが、内容を考え直すきっかけとなった。

### (4) 「情報交換会」

- ・細かい部分のディスカッションや、他の先生方との授業等での工夫が何え、非常に有意義でした。
- ・一番、実りの大きかったセッションです(笑)
- ・合宿なので、あまり時間を気にせずに話をできて良かったです。福井の他の大学の先生との交流の機会もあまり他にないのでありがたい。
- ・他大学の先生方と交流が持てたことで、今後ネットワークを通じて、FD活動に役立てたい。
- ・楽しく過ごせました。

### (5) 「スキルアップ講座」

(田中洋一氏、富永修氏、加藤優子氏)

- ・LMSへの興味が改めて湧きました。初期段階での設定にはどの位の時間がかかっていますか？
- ・とても身近で、またLMSを使おうと思った。特に、確認テストという予習のための10問くらいを作って、加藤先生のように調査してみたい。小テストの調査結果がupするというファイルはすでにあっただけ・・・。
- ・富永先生のお話がとても身近で私でもやってみたい、やれるかなと思いました。
- ・自分の使い方と比較しながら聞くことができ、こ

れからの使い方の改善のイメージをもつことができた。

- ・凄いい例がたくさんできているなど感じました。自分が必要と思った機能を相談できるのがフレックスの利点。

## 2. 各部署のFD活動

全学横断的な取り組みはもちろんのこととして、部局主体での企画実施を重視するようになって久しい本学FD活動は、今年度、いっそう部局毎の独自性が鮮明になった。部局の性格が相互に異なっているのであるから当然といえば当然であるが、以下に示された報告から、それぞれの部局が工夫を凝らし、現場の具体性に寄り添った活動が展開されていることが理解いただけると思う。一見分かり易いが実効性については曖昧な、数値目標などによる管理に適応したFD活動よりも、大学教育として有効であると考えられる。

### 2.1 経済学部（新宮晋・杉山泰之）

経済学部の本年度のFD活動は、①「授業評価」（前期、後期）、②「授業公開」（4件、うち前期3件、後期1件）、③成績評価についての意見交換を目的とする教員懇談会を開催した（後期）。また、チームとして個別には把握していないが、演習や外書講読の進め方等について臨機応変に話し合いが行われており、FD活動に関する議論は日常業務の中でも行われている。

#### 2.1.1 授業評価アンケート

<2014年度前期授業評価アンケート>

問	1.意欲	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.22	3.29	3.12	3.16	3.32

<2014年度後期授業評価アンケート>

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.22	3.33	3.14	3.19	3.35

- 経済学部の平均は全学平均とほぼ同じ水準になっている（後期の「4. 関心」は経済学部でやや高い）。
- 2011年以降、前期科目、後期科目とも、全ての項目で増加傾向にあった。その中で、比較的高い数値となっていた「2. 授業方法」と「5. 総合評価」は高めに安定し、どちらかといえば低い数値であった「1. 意欲的受講」と「3. 内容理解」が上昇傾向にある。
- 特に、「3. 内容理解」は2011年度まで経済学部平均で3を切っていたことを踏まえると、大きく改善してきている。

#### 2.1.2 授業公開

##### (1) 方針

経済学部の授業公開ポリシーは、従前通り、具体的な授業参観を通して公開者・参観者の授業改善に資することを目的とし、公開者と参観者の間で率直な意見交換を行うことである。

##### (2) 実施実績

[前期]: 今期は3件の授業公開が行われた。

授業名: 環日本海経済論

日時: 2014年7月7日(月)、3限(13:00~14:30)

担当教員: アンドレイ・ベロフ

場所: 共通授業棟 L107

### 概要

この日の環日本海経済論は、ロシア極東地域の対外経済関係についての授業であった。当該地域の対外経済関係に関する諸データに加え、ビデオ教材やベロフ教授の現地調査の画像なども効果的に活用されていた。授業はパワーポイントを使って行われ、スライドの画像や図表の一部は資料として学生に配布されていた。

### 参加教員からのコメント(順不同)

- 極東地域の対外経済関係に関するデータがとても詳しく参考になった。
- スライドだけでなくビデオを使って現地の状況を紹介しており、とてもイメージしやすかった。
- パワーポイントで紹介した図表は、一部だけでなく、すべて資料として配布しても良いかもしれない。
- 質問やコメントがあるかどうか、途中で何度か学生に問いかけても面白いかも知れない。
- 授業の終わりに提出するリアクションペーパーについて、一人一枚として、学生から手渡しで受け取っていたところが参考になった。

### 担当教員からのリプライと提案(順不同)

- ビデオはほぼ毎回見せている。教材の更新の必要性を感じるところがある。
- 現在、質問はリアクションペーパーに書かれていることが多く、その場合、次回の授業で答える形になるが、学生がその場で感じた疑問をその場で引き出す取り組みもしていきたい。
- パワーポイントで紹介したスライドの配布について、枚数の関係上、すべて配布する形はとっていないが、PDFファイルでホームページにのせる形で対応している。
- 授業中に図表をスマートフォン、ノートPC、タブレットで確認してもらうために、L107~L110の大授業室へのWi-Fiの整備を提案したい。

授業名: 文化経済学

日時: 2014年7月8日(火)、2限(10:40~12:10)

担当教員: 山崎茂雄

場所: 共通授業棟 L111

### 概要

この日の文化経済学は、文化政策とファンディングについての授業であった。ファンディングに関する日本の歴史や地元福井の取り組みの紹介に加え、実際に山崎教授が行った現地での調査・研究についても詳しく紹介されていた。授業はパワーポイントを使って

行われ、スライドの画像や図表は資料として学生に配布されていた。

#### 参加教員からのコメント（順不同）

- 学生のところまで行き、質問したり、コメントを求めたりする手法はとても参考になった。
- スライドの図表や画像が効果的に用いられていた。特に、現地での調査・研究に関する画像が豊富にあったため、現場をイメージしながら、興味深く解説を聞くことができた。
- スライドの背景の色と文字の色が類似的な箇所は、配布資料として白黒印刷したときに見づらくなってしまったため、少し気になった。
- スライドには、関連する節ごとに大見出しがあっても良いかもしれない。

#### 担当教員からのリプライと提案（順不同）

- スライドの配色や大見出しの挿入などについては、改善を積極的に進めていきたい。
- 実例として示した現場の画像については、独自のリサーチをもとに入手した第1次資料である以上、授業において、今後も広く紹介していきたい。
- 上記の点を踏まえ、スライドなど視覚教材を最大限利用するとともに、レジュメ、配布資料をさらに見やすくしていきたい。
- 一方的になりがちな大授業室での授業においても、学生との対話を進めながら、学生の反応や理解を確認していく工夫を重ねていきたい。

授業名：生産管理論 I

日時：2014年7月14日（月）、2限（10:40～12:10）

担当教員：木野龍太郎

場所：共通授業棟 L113

#### 概要

この日の生産管理論 I の授業は、品質管理についての授業であった。まず、前回の授業内容を復習する小テストを行い、その後、教科書と板書を中心に進めていくが、ビデオ映像も効果的に導入していた。また、新聞記事などを含め、その日の授業を補完する資料が学生に配布されていた。

#### 参加教員からのコメント（順不同）

- 小テストから本編への流れがスムーズで、そのおかげで授業当初から教室に適度なテンションがあり、気持ちよく授業を受けることができた。適宜質問を交えて学生に答えさせるのも、テンションを維持するのに効果的であった。
- 中身の分量も妥当で、そのうえ丁寧な説明が学生たちの問題意識を喚起するのではないかと推察する。
- 小テストにかかる時間はもう少し短くても良いかもしれない。
- 配布資料はどのような役割で用いて、どの程度授業内で解説しているか知りたい。
- 授業のルール、評価の方法がとても明確で、学生も安心できると感じる。

#### 担当教員からのリプライと提案（順不同）

- 毎回の小テストに費やしている時間は確かに少し長いかもしれない。復習を兼ねているにせよ、もう少し短くする方法を検討すべきであろう。
- 教科書、講義中に配付する資料、板書と、それぞれが講義のなかでどのような役割をしているかが、やや曖昧であるように思うので、再検討すべきと感じた。
- 授業のルールや評価方法を第1回の講義で詳細に説明し、公平・公正な評価のための取り組みについて、理解してもらえたのは嬉しく思う。これは学生に示すガイドラインであると同時に、自分自身の基準が崩れないためのものでもあるので、必要に応じて見直していきながら、しっかりしたものにしていきたいと思う。
- いつもあまり参加者が多いとはいえないので、やはりもっと多くの教員に参加して欲しいと思う。本学ではティーチングスキルを高めるための研修などがあるわけではないので、特に若い方々にはたくさん参加して欲しい。
- 学生からの評価が高い講義については、FD チームから依頼して公開してもらおうようにして、そのノウハウを共有できるようにしてはどうか。
- 事務職員（特に新任）の方々にも参加して頂き、教員がどのような講義を行っているのか知ってもらうとともに、教員に直接届いていなくても、事務方にだけ届いている学生からの要望や意見などを教えてもらって、双方が高めていくように出来ればと思う。

[後期] 1 件の授業公開が行われた。

授業名：外書講読 I

日時：2015 年 1 月 14 日（水）、5 限（16:20～17:50）

担当教員：清水葉子・新宮晋（共同授業）

場所：L113

### 概要

これは、中期計画における「外国語による授業」に対する一部教員のボランティアな対応の試みであり、2 年次後期必修科目である「外書講読 I」の内容に沿ったテーマで、英語によるディベートを行うというものである。詳細は後に示すとおり、15 コマのうち約半分で、ディベートに参加する外書担当者が共通のテキストについて内容理解を導く通常の講義を行い、それに沿ったテーマを確定し、そのあとは学期最後のディベート本番（2 回に分けて行った）まで World Café のスタッフ 2 人の協力を得ながら、複数チームに分かれた学生が論点整理や反論準備などの作業をくりかえし、以上の事前準備をもとに行った 2 回のディベート本番のうちの一つを公開したものである。

### 参加教員からのコメント（順不同）

- ディベートの発言を板書しながら進めているのが参考になった。発言の内容を参加者全員に伝え、議論がうまくかみ合うのに役立っていると感じた。
- 発言までによく内容を吟味する時間が与えられているのがよいと思った。
- [参考になった点] じっくり待って、学生に十分に考えさせていること

- [参考になった点] 事前の準備とともに、当日の学生の脳の働きを高めようとしていたこと
- [参考になった点] 引き出した学生の意見を否定せず、肯定的に評価していること
- 発言する人にマイクを渡しながらか進めるとよいのではないかと思った。
- 発言の学生にマイクを持たせると、参加学生以外にも聞きとりやすい。
- 相手側のチームが予想しない発言をしてきたときに、それに対する反論をその場で考えて発言していたのが印象に残った。
- 要約して板書する際、学生にさとられずに難しいと思われる単語を使わないのもすごい。

#### 担当教員からのリプライと提案

今回の「英語ディベート」の試みは、昨年度（清水・廣瀬・新宮が参加）に続く2回目で、その時の反省をふまえつつも、依然として試行錯誤しながらの進行であった。

授業意図としては、昨年度のFD報告の「課題と展望」にあった複数教員の担当科目相互乗り入れの試みになることとともに、「外国語による授業」の実効性を確認することであった。公開時に出た意見へのコメントの前提として下表に従って半期の授業全体を示しておく。

#### 平成26年度「外書講読I」スケジュール

日時	曜日	period	place	teachers	instructors	業務内容 what to do
1 <sup>st</sup> Debate						
11月12日	水 Wed	2	café	新宮・清水	Bill-san & Dee-san	ディベートのテーマ決定 staff meeting
11月25日	火 Tue	3	E202	清水 Shimizu	Dee-san	ディベート前指導 lecture
11月27日	木 Thus	3	E103	新宮 Shingu	Bill-san	ディベート前指導 lecture
12月2日	火 Tue	2	café	w/appointment	Bill-san	質問対応 consultaion
12月2日	火 Tue	3	E202	清水 Shimizu	Bill-san	ディベート前指導 lecture
12月3日	水 Wed	2	café	w/appointment	Dee-san	質問対応 consultaion
12月4日	木 Thu	2	café	w/appointment	Bill-san	質問対応 consultaion
12月4日	木 Thu	3	E103	新宮 Shingu	Dee-san	ディベート前指導 lecture
12月8日	月 Mon	1~2	café	w/appointment	Dee-san	質問対応 consultaion
12月9日	火 Tue	3	E202	新宮&清水	Dee-san	Debate : teamA 新宮 vs teamA 清水
12月11日	木 Thu	3	E103	新宮&清水	Bill-san	Debate : teamB 新宮 vs teamB 清水
2 <sup>nd</sup> Debate						
1月6日	火 Tue	3	E202	清水 Shimizu	Dee-san	ディベート前指導 lecture
1月7日	水 Wed	1	café	w/appointment	Dee-san	質問対応 consultaion
1月7日	水 Wed	2	café	w/appointment	Bill-san	質問対応 consultaion
1月8日	木 Thu	3	E103	新宮 Shingu	Bill-san	ディベート前指導 lecture
1月9日	金 Fri	1	café	w/appointment	Dee-san	質問対応 consultaion
1月13日	火 Tue	1	café	w/appointment	Bill-san	質問対応 consultaion
1月14日	水 Wed	5	L113	新宮&清水	Bill-san	Debate : teamA 新宮 vs teamA 清水
1月21日	水 Wed	5	L113	新宮&清水	Dee-san	Debate : teamB 新宮 vs teamB 清水

今回清水（火曜日 3 限）・新宮（木曜日 3 限）担当の「外書講読 I」がこの形式の授業に関わった。それぞれの外書担当者の学生を 2 チーム（8 名+7 名）に分け（全部で 4 チーム）、テーマについての肯定派・否定派を担当毎に固定する。チームで準備を進め、ディベート本番では担当の異なるチームの肯定派と否定派が論戦する。第 1 回目の予備的ディベートを 12 月 9 日と 11 日とし、本格的には 1 月 14 日と 21 日に最終的なディベートを行った（授業公開したのは、このうち 1 月 14 日の分である）。毎回のディベートでは 2 チームが論戦するので、残りの 2 チームはオブザーバーとして参加する。

テキストは Michael Sandel “What Money Can’t Buy – The Moral Limits of Market”, 2012, Allen Lane（前年度と同じであるが異なる箇所）とし、この中からテーマを確定した。後期の授業開始から 11 月半ばまではこの同じテキストを使い、11 月 25 日から始まる事前指導までは担当者は別個に授業を進めた。11 月 12 日の staff meeting で外書担当者と World Café の二人（Daryl Boyd 氏（Dee-san）と William MacDonald 氏（Bill-san））で最初の打ち合わせを行い、テーマの決定とスケジュール調整を行う（研究・交流推進課の澤崎主事にも同席していただき、事務サイドから助言をもらう）。以後は特に meeting は行わず、事前指導の機会とメールのやりとりを通じて、指導内容や授業の進め方を微調整していった。

11 月 25 日からの事前指導は担当者の授業時間帯に Dee-san または Bill-san をインストラクターとして招き、事実上彼らのリードで授業は進められる。担当者も自分の担当日以外の授業に毎回参加して、サポートに回った。また、事前指導以外に質問対応の時間をとり、この時間帯には各チームの学生が個別にインストラクターとアポイントメントを取って出向き、論点の英語だけでなく、論点そのものも詰めて行く作業の時間とした。

これら事前授業・質問対応といった事前準備では、ディベートについての基礎的なレクチャーから簡便なディベート形式の提案、mock debate の実践まで、両インストラクターの献身に依るところが大きい。二人とも、ディベートの方法論や意義についての経験（高等学校でのディベート指導の経験が豊富）に基づいた深い知識と、我々が提案したテーマについての正しい理解にもとづき、積極的に提案してこられたおかげで、授業内容についての学生の理解も格段に深まることになった。

以上の準備を経て、12 月 9 日及び 11 日に、第 1 回目のディベートが行われた。ただ、この時点では十分なものではなかったため、最終ディベートも同じテーマでやることとし、1 月 14 日、21 日の最終ディベートに向けた 1 月 6 日からの事前準備は、最初のサイクルを基本的に踏襲し、英語の練り上げだけでなく、内容についての論点の拡大・反論の可能性について再反論の準備などに時間を当てて本番に臨んだ。

さて、以上の経緯のもと 1 月 14 日のディベートを授業公開した。参観者からのコメントや当日の議論について若干のコメントしておきたい。

- 授業については、基本的に好意的に評価していただいた。ただ、後の教授会での報告に際しては、「外書講読」という科目の適切性について説得力ある異論もあったことを付言しておく。
- 具体的には、昨年と同じ試みについて経済学部教授会で報告したように、以下の点でメリット・デメリットがあるという判断である。

①グループワークとしての効果：

1. ディベート前提のテキストの読み込みなので、表面的に翻訳するだけでなく、学生どうしで内容についての意見・賛否を活発に討論でき、内容理解に資した。
2. 授業時間外にもチームで集まって、論点やその根拠を明確にするための準備作業を積極的に行った。
3. チーム内のメンバー間で関心や能力の濃淡がコミットの度合いを決める面が出てしまう、というグループワークのデメリットがここでも見られた。
4. 参加型学習故の学生の満足度は極めて高く、翻訳と解説のルーティンな外書講読よりは面白がっていることが明白であった。

②英語教育としての効果：

1. ディベートのために主張にそった表現をテキストから拾ったり、事前に主張を英訳したりすることから、個別の英語の勉強時間だけでも確実に増えた。
  2. 相手の意見に対してその場でなんらかの反論が必要となり、英語を話す強い契機になった。
  3. 学生自身も実感したと言っていたことであるが、何よりもロジカルに思考する訓練として良い。日本語でのややルーズな発言ではすまないが故の論理の練り上げが、内容についての深い理解に結びつく。
  4. 上記と重なるが、ディベートでの論点補強の強迫が経済学の理論の動員を促進し、結果として経済学の考え方の理解も深まった。
  5. ワールド・カフェのスタッフになじみができ、カフェに入って英語を使うことのハードルは下がったと思われる。
  6. 数ヶ月の授業で語学能力が上がることは考えにくく、これをきっかけに何割かの学生が英語勉強を始める、あるいはカフェに出入りするといった継続性のきっかけになることを期待したい。
- 複数教員の担当科目相互乗り入れ型授業の試みとしては、サンプルを示せたと考える。
  - 「外国語による授業」の実効性という面では、成果があったとは断じがたい。
  - 教授会での報告に際しては、この試みを教員の個別判断で「外書講読Ⅰ」として継続していくことはいい（FD活動では、内容に対し立ち入らないという原則である）として、学部として「外書講読」の授業形式として一般化し担当を順次分担することには強い異論があり、また、本来の「外書講読」の原則に外れているのではないかという指摘もあった。

### 2.1.3 部局内FD研修

経済学部懇談会

日時：2014年12月10日（水）、4限（14:40～16:10）

場所：経済学部棟9階会議室

テーマ：成績評価についての意見交換

2014年度の経済学部FD研修としての懇談会では、それぞれの教員が担当授業（特に講義科目）について、どのような形で成績評価を行っているかを紹介し、その上で、特に注意している点や気になる点などについて意見交換した。両学科から14名が参加した。

### 懇談会での議論の概要（順不同）

- 成績評価の方法は、定期試験のみ、定期試験＋レポート、定期試験＋中間テスト、定期試験＋小テストなど、定期試験を中心とする評価となっている。ただし、なお、レポートの内容としては、授業内容を補完する課題レポートだけでなく、毎回の予習レポートなども実施されている。また、小テストについては、毎回行う場合と講義期間中に3、4回場合がある。毎回、出席確認のためにリアクションペーパーや小テストが活用されることもある。
- 試験問題は論述式中心であるが、穴埋め式や選択式が併用される場合もある。また、計算問題の出題も見られる。なお、論述式の出題方法は、1行問題や用語ヒントを出す場合など様々である。
- 履修学生のうち単位を取得する学生の割合や、優・良・可の割合は、科目によって様々である。不可となった学生も翌年に再度受講することによって、徐々に理解が深まっていく面は見受けられる。
- 試験の不正防止対策として、持ち込み可とすることも一つの方法である。例えば、講義内容を基に作成した自作ノートを持ち込み可とし、さらにそのノートを回収することで当該学生の勉強の様子を確認することもできる。
- 持ち込み可の試験でも、答案ののぞき見、見せ合いや、スマートフォンの不正使用、替え玉受験などに、十分に注意しなければならない。
- 基礎ゼミでノートの取り方や学習の仕方から取り組む必要があると感じる。
- 問いに対して、どのくらいの分量で何を書くのかを自ら判断できない学生が増えている。また、要点を上手くまとめて文章にすることができていないと感じる。
- 経済学的な思考としては、具体化から抽象化と抽象化から具体化の両方が求められる。

#### 2.1.4 授業改善についての課題と展望

課題と展望については、昨年この欄（2.1.4）で述べられていることが基本であり、改めて繰り返すまでもない。FD活動の本旨は個々の教員の創意と工夫をサポートすることである、という点については、今年度も、そして今後も変わりはない。

今回の学部懇談会でも明らかになったことであるが、教員は不断に授業改善のための試行錯誤を繰り返している。今回は成績評価の方法について参加教員からさまざまな報告や意見が出されたが、それぞれの科目の特性や授業方法などから、一律に「正解」の評価方法があるわけではないことがよく分かる。と同時に、授業方法や到達目標について真剣に模索する中で、最も適切な成績評価が何であるかについて各教員は常に試行錯誤しており、これについては、これも昨年言及したように、他の教員の極めて具体的なやり方や考え方についての情報が、カスタマイズ次第で大いに役に立つこともある。懇談会は毎度そういう発見の場であるだけに、さらに頻度を上げていくことは、引き続き課題とすべきであろう。

懇談会で確認できたもう一つのことは、教員サイドの目標設定や方法に対する学生サイドからのフィードバックとして、レポートや試験の答案からの情報が改めてきちんと見直されるべきである、ということである。「授業評価」などももちろん学生との間のコミュニケーション・ツールとして尊重すべきであるが、当然のことながら、学生の答案やレポートは教員

と受講者との間の最も重要なコミュニケーション・ツールであり、授業改善の最も基本的な種である。期待通りでない場合には当然授業改善はやらざるを得なくなる。このいちばん基本的な回路が等閑視されてはならない。

ただ、例えば記述型解答がとりわけ期待を裏切るなど、文章力が弱いといった学生の一般の傾向が共通して見える面もある。これらは個別の対応では難しいので、部局の課題として、あるいは全学的な課題として考えることで改善できるかも知れない。FD チームとして部局内・部局間での対応を考えることは有効であると考えている。

## 2.2 生物資源学部（松岡由浩、伊藤貴文）

### 2.2.1 授業評価について

本年度前期の学部講義についての評価は、「意欲的受講」3.13（昨年度 3.09）、「授業方法」3.18（昨年度 3.24）、「内容理解」3.02（昨年度 2.97）、「関心」3.09（昨年度 3.10）、「総合評価」3.22（昨年度 3.26）であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.21、「授業方法」3.30、「内容理解」3.11、「関心」3.16、「総合評価」3.32）と比較して、全項目にわたってわずかに低い。また、後期の学部授業についての評価は、「意欲的受講」3.17、「授業方法」3.24、「内容理解」3.05、「関心」3.12、「総合評価」3.28であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.22、「授業方法」3.32、「内容理解」3.13、「関心」3.19、「総合評価」3.36）と比較して、全項目にわたってわずかに低い。これらの結果から、生物資源学部では、やや難しいと思われる講義内容を比較的多く含むカリキュラムでありながら、それに真剣に学習に取り組む学生から、総じて、良好な評価を受けていると考えられる。今後は、現在の方向性を基本に、学生との対話を充実させ、理解度をきめ細かく把握しつつ講義を進める工夫を継続することが肝要と思われる。

大学院の前期講義についての評価は、「意欲的受講」3.00、「授業方法」3.50、「内容理解」2.96、「関心」3.42、「総合評価」3.38であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.41、「授業方法」3.64、「内容理解」3.14、「関心」3.51、「総合評価」3.58）と比較して、全項目にわたってやや低い。この結果から、大学院では、学生が高度な講義内容の習得にやや難しさを感じている様子がうかがえる。従って、大学院では、学部以上に、学生との対話を充実させ、理解度をきめ細かく把握しつつ講義を進める工夫を進めることが必要と思われる。なお、後期の科目については、「演習」「期間外」「少人数」等の理由により、評価対象外となった。

### 2.2.2 授業公開の方針と実績

#### （1）方針

生物資源学部では、各教員が、必要に応じて自分が担当していない講義を聴講し、授業内容を直接確認できるよう、全講義を対象に、希望者が事前に担当教員に連絡することでいつでも参観できる「随時公開制」を採っている。

#### （2）実績

今年度、担当外の講義を参観した教員はいなかった。本学部では、後述するように担当教員による講義の工夫等をアンケート調査により共有し、授業内容の連携を進めている。加えて、学生

によるFDアンケート調査からも、教員に対するクレームはない。以上の点から、現行のカリキュラムは無理なく実施されていると判断し、授業への参観企画に、特段、教員の動員をかけることは避けた。

### 2.2.3 授業改善の取り組み

生物資源学部では、2011年度より、各教員が、学生の理解を助けるために行っている、授業(学生実験を含む)上の工夫をアンケート調査により収集し、全教員でその情報を共有する取り組みを行っている。

本年度は、1月21日に学部長からアンケート用紙が配布され、教育学習支援チーム員による回収・集計を経て、1月31日に結果が全教員に通知された。

本年度のアンケート項目は、「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」、「授業を担当しての感想など」、「学生の理解度を把握するための試み」、の3点であった。また、アンケートへの回答は任意とし、率直な意見の収集に努めた。

なお、この取り組みは、自身の講義をより良くする方法を考える上で大変参考になると、多くの教員から好評価を得ている(2013年度報告書、2.2.4「授業改善についての課題と展望」参照)。

アンケート結果を以下に記す。

- ・教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること

学生がこれまで学んできた知識や学生実験で利用してきた機器類の復習を意識しながら、机の上で学ぶべきことが、実験室や将来働く際にどのように利用されているかを知ることによって、それらに対して興味を持てるよう努めた。まず初めにポイントと授業の流れをまとめたプリントを配り、その日の授業の内容と方向を示した。そして、難しい理論のところは、簡単な実験を行い(子供向けに配られている偏光、回折フィルムを持ち出し)、これがタンパク質の解析にも利用されていることを示した。結果、身近な例があるのはわかりやすい、と素直なコメントを学生からいただいた。

学生が予習復習しないことを前提にして、毎回、授業の前半に、前回の授業内容の小テストとその解答説明をしている。

学生が実験プロトコルを予習しないことを前提にして、毎回、授業の前半に、行う実験内容の説明をしている。グループ分けをランダムに行い、あまり知らない学生同士間での共同実験、課題解決討論、レポート作成を促す。課題はランダムに各グループを指名して公開説明させる。

学生が実験プロトコルを予習しないことを前提にして、毎回、授業の前半に、行う実験内容の説明をしている。グループ分けをランダムに行い、あまり知らない学生同士間での共同実験、課題解決討論、レポート作成を促す。課題はランダムに各グループを指名して公開説明させる。

本年度は出席代わりに毎回ミニツッパーパーを実施し、当日の講義内容のポイントお

<p>よび講義内容に関する質問・疑問点等を記入してもらうようにした。質問に関しては、同一内容の質問を優先して次回の授業の冒頭にて説明をした。これを実施するにより、理解しにくかった部分や説明不足の点を把握することができ、学生の理解の助けに大いに役立ったと感じられた。講義内容と直接は関係ない質問も多く見られたが、生物に対する興味を高めてもらえるよう、なるべく答えるようにした。負担は多いが、来年度以降も継続したいと考えている。</p>
<p>昨年と同様、半数近くの学生が高校で生物を全く勉強していないため、少しでも生物に興味をわくよう、教科書に関連した最新的话题を写真等を用いて紹介するように心がけた。なお、生物用語に慣れてもらうためにこまめに小テストを行ったが、これは学生にとって学習の助けになったようである。</p>
<p>前期の植物病理学の要点を確認できるような実験内容にしている。また、植物病理学を履修していない学生がいるため、実験の前に長めに講義を行い、そして実験の間にはできるだけ声をかけるようにした。比較的細かい作業が多いが、1日の作業内容をできるだけ少なくし、ゆとりをもって取り組めるようにしている。</p>
<p>パワーポイントスライドを用いて講義している。微生物を触媒とする反応については、アニメーションを駆使して、反応の様子がわかりやすいように工夫した。また、発酵企業が作成したビデオを使用して生産現場を理解させるようにした。講義の途中でビデオを流すことによって学生の集中力を高める効果があったように思う。また、講義に関係するTV番組の一部を録画して流した。番組製作者は内容を面白く、わかりやすく編集しているので講義の進め方の参考にもなった。</p>
<p>高等植物の生存に必須である水と植物栄養素の吸収、輸送、同化の理解を目指し、個別の要素よりも全体像の把握に重点を置いて指導した。講義には板書とスライドを使用し、スライドの内容については配付資料として渡した。講義のキーワードを授業の開始時に板書し、講義の内容理解を高める工夫をした。授業のペース配分としては学生の集中力が高い50分間を講義に、その後の時間をコラム的にリラックスして最新の研究成果や踏み込んだ内容の話をするというように、授業時間と内容にメリハリをつけた。また、理解度を把握するために、小テストと班単位でのプレゼンテーションを実施した。また、小テストにはコメント欄を設け、よかった点や改善点を挙げてもらった。</p>
<p>教科書だけでは理解しづらい内容については、動画を見ることにより理解を助けている。</p>
<p>復習しやすいように、整理された板書を心がけている。</p>
<p>パワーポイントおよびハンドアウトの図、分かりやすくかつ美しいものとした。昨年度と同様に、学外講師2名を招き、福井地域の生物多様性について特別講義を行っていただいた。</p>
<p>例年、講義は説明に十分な時間が充てられるようパワーポイントを用いて行っている。昨年度までは、学生が講義内容の理解に集中できる様、スライド資料を配布していたが、講義への集中力を欠く学生も多くみられたため、本年度はスライド資料を配布せずに授業を行ってみた。前年度よりは積極的にノートをとる学生の姿が多く見られたが、講義の感想で、「板書が大変で理解する時間がない」「講義の進行速度が速い」</p>

等の指摘を受けた。来年度は適宜空欄を設けたスライド資料を学生に配布し対応したいと思う。

「英文を（機械的な和約に頼ることなく）英語のまま理解できるようになること」を目標に掲げ、初見で各専門分野の英文を訳すことを目指してもらいました。生化学・分子生物学・微生物学・食品科学の4分野を担当し、各専門分野で頻出する単語リストを配布しながら授業を進めました。毎回の授業で前回の教材をもとに小テストを実施しましたので、受講生は必死だったと思いますが、今となってはよい思い出なので（?）。その後の役に立っていることを願っております。

食品の三大機能のうち、最も基本的なものが栄養機能。「栄養化学」では、栄養素（五大栄養素＋食物繊維）の消化吸収・代謝・体内での役割に焦点をあて、その役割を生化学の視点で解説しています。できるだけ身近な話題に結び付けることで、親しみを持ってもらおう工夫をしています。また理解度向上のため期末試験以外に小テスト3回、中間試験1回を実施しています。

食品の三大機能のうち、嗜好性機能と生体調節機能を担っている食品成分に目を向けてもらうことを狙いに行っています。このため身近な食品の現物や容器（原材料名欄を見せよう）、香料を授業中に回覧するなど、親しみを持ってもらおう工夫をしています。また理解度向上のため期末試験以外に小テスト3回、中間試験1回を実施しています。

講義が教員から学生への一方通行にならないようにするために、学生を1グループ6,7人にグループ分けし、1つの課題についてグループ内で議論してもらった。その際に、グループ内で進行役やまとめ役などを決め、出た意見をまとめ、各グループの代表者に最後に発表してもらうようにした。2年生で、お互いがあまり親しくないこと、グループ内で積極的に意見を述べて議論を進展させる人が少なかったことなどから、各グループでの議論はあまり盛り上がらなかった。積極的に意見が出せるような状況をつくる等、さらに工夫し、学生が自分で前向きに発言し、人の意見を聞いてまとめることができるようにしていきたい。

#### ・授業を担当しての感想など

生物物理化学は教科書との相性が個人で異なり、難易度も高いが、学び続ければ生命現象を説明するのに重要であることに気づき、楽しい内容である。そのため、学生に辛くならないよう、嫌いにならないように気をつけている。物理化学的な説明を日常的なこと、例えば、お菓子を食べることやゲームに置きかえることができないか考えている。

選択科目なのでもう少し厳しく単位判定をやっても良いかと考え中。小テストだけ受けて、抜け出す生徒は欠席扱いにしている。1限目なので授業開始時の出席率が30%程度。小テストをやめるともっと低くなることが予想される。

実験レポート未提出者の数が増加傾向にあり何らかの対策を考慮中。

<p>月曜 1 限は必修の科学英語 I であるため、ほとんどの 3 年次生および数名の 4 年生が履修を届け出ているようであるが、当初から意欲が感じられない学生が数名見受けられた。本年度からはミニツペーパーを利用して学生の様子を把握し、できるだけ難解さをやわらげられるよう心がけたが、一部の学生にとってはあまり役立たなかった点が残念である。</p>
<p>教科書に沿って講義を行っているためあまり板書をしていないが、このことが学生にとっては不満であるように感じられる。講義を振り返られるよう、もっと板書を工夫しなければならないと考えている。</p>
<p>みんなまじめに実験に取り組んでいたように感じられた。しかしながら、テキストを予習してきている学生はあまり多くなく、例年以上に質問が少なかった点が気になった。</p>
<p>相変わらず質問がでない。講義内容をよりよく理解するためにも学生諸君はもっと質問するようにした方がよいと思う。又、遅れてくる学生や、途中で教室を出る学生がいるが、授業には受ける側のマナーがあることを自覚すべきである。</p>
<p>演習問題の時間がとれるといいなと思う。</p>
<p>全体的にまじめな受講態度であった。</p>
<p>学生の講義に対する積極性をいかに引き出すかが課題と感じている。</p>
<p>(事前の予想通りだったのですが)「わからない単語を辞書で調べ、適当な訳語を機械的につなぎ合わせる」、という和訳方式の受講生が多いことを感じました。英語は英語のまま元のニュアンスをつかみながら読みとること、毎日英語に触れること、を目指してもらえれば、実力が伸びると思います。</p>
<p>受講生が授業内容についてこられているか、ランダムにあてたりしながら進めています。今年は受講生の反応がよくわかり進めやすく感じました。別の授業(科学英語 I)で濃密な時間を共有していたためかもしれません。</p>
<p>例年と異なり受講生の反応が読み取りにくく、授業を進めにくい印象を覚えました。やはり、表情がはっきり見える受講生が多いと、教える側はホッとできます。そんな受講生を増やすには、受講生と仲良くなることが一番大切に感じます。なお、小テストと同様の内容を中間試験の問題にも入っていますが、例年に比べて苦戦した受講生が多かったようです。</p>
<p>生理は、ホルモン名など覚えるべき専門用語が多く、前向きに勉強しないと理解が難しく、興味がないと苦痛に感じると思われる。自分の体の健康を意識して考えると、比較的頭に入りやすいのではないかと考え、病気を含め具体的な例を多く出して、説明するようにしている。</p>

・学生の理解度を把握するための試み

<p>毎回、授業の前半に、前回の授業内容の小テスト</p>
<p>実験レポートに感想欄を設け参考にしていく。</p>

ミニッツペーパーに質問・意見欄を設け、次回の講義の冒頭に答えるようにした。
生物を勉強してこなかった学生がかなりおり、講義後不安を訴えてくることが多かった。そのような学生に対しては、小テストの返却時を利用して意見等を聞くようにした。
実験の待ち時間を利用して、できるだけ学生と会話するよう心がけた。レポートには、講義に関する感想や意見を記述してもらう欄を設けている。
授業アンケートに記される意見を期待しているが、殆ど記入がないのが残念である。
ミニッツペーパー
ミニッツペーパー
授業評価アンケートに記載すれば回答することを伝えた。
学生実験指導時に、学生から講義の印象や講義内容の理解度などの情報収集を行っている。講義期間中には講義に関する意見箱を設置している。
小テストの結果から、前回の内容をよく復習してきたかどうか、よく伝わってきました。
毎年独自アンケートを取っています。例年同様、身近な話題は好評でした。小テストが勉強にきっかけになって役に立っている、という声もたくさんありました。小テストと同様の内容を中間試験にも入れていますが、何度も同じ問題で間違ふ理由については、「勉強不足」と答えた受講生が圧倒的でした。
毎年独自アンケートを取っています。例年同様、身近な食品の話題や、食品例（現物／容器）などの回覧は好評でした。小テストと同様の内容を中間試験にも入れていますが、何度も同じ問題で間違ふ理由については、「勉強不足」と答えた受講生が圧倒的でした。「覚えることが多くて大変」という声もやはりありますので、授業方式を変えるか毎年考えていますが、まだふみこめていません。「説明が丁寧で理解しやすかった」という声もいただきましたので、口頭説明を聞き取ることが上手な受講生と苦手な受講生で、印象が割れているかもしれません。なお、意識的に雑学要素を取り入れています。こちらは例年同様好評でした。
途中でアンケートを取り、授業の難易度、スピード、進め方などについて意見収集を行った。プリントした資料を配布し、パワーポイントでの説明により授業を進めていたが、重要な部分は黒板に書いて説明してほしいとの意見があったため、途中から板書を増やして対応した。

#### 2.2.4 授業改善活動についての課題と展望

本年度、生物資源学部では、学部長と教育学習支援チーム員の懇談会を開催し、FD 活動の今

後のあり方を議論した。詳細は次のとおり。

日時：2015年2月1日 午前9時から30分間

場所：生物資源学部棟 1階 会議室

出席者：岩崎行玄（学部長）、松岡由浩（教育学習支援チーム員）、伊藤貴文（教育学習支援チーム員）

#### 議事録

- ・ 生物資源学部では、JABEEを通じて、カリキュラムの確認・見直し等の教育改善活動を不断に行う体制ができている。
- ・ さらに、各教員によるミニッツペーパーや独自アンケートの実施等、授業改善の多様な取り組みがなされている。
- ・ 本学部で毎年行っている「授業上の工夫アンケート調査」は、各教員による取り組みについての情報を共有し活用を図る方法として、非常に有効に機能していると認められる。
- ・ このため、本学部の授業改善活動として、今後も「授業上の工夫アンケート調査」を継続して実施する。
- ・ 今後、教育学習支援チーム員の交代に際しては、「授業上の工夫アンケート調査」の実施を引き継ぎ事項として伝達する。

### 2.3 海洋生物資源学部（富永修、松川雅仁）

#### 2.3.1 授業評価について

2014年度の授業評価への参加教員数と参加科目数は、前期が15人（93.8%）、24科目（92.3%）、後期は16人（100%）、20科目（90.9%）でオムニバスや少人数のために実施しなかった科目を除いて、ほぼすべての科目で実施された。また、それぞれの教員は授業評価に対してコメントを公表していた。コメントの内容は、各項目の評価結果に対する考察と自由記述に対する回答であった。特に、自由記述の意見に対して丁寧に記述されており、今後の改善方法が具体的に示されていた。一方、学生の指摘に対して、具体的に反論が述べられていたり、学生に対して教員からの要望事項も記述されていた。これらは、学生が教員の回答に対して再度応答する事を期待していることのあらわれと思われる。これらのコメントが活用されるためには、授業評価に対する教員コメントが公表されていることを学生に周知することと、学生からの再応答の仕組みを作ることが必要と思われる。

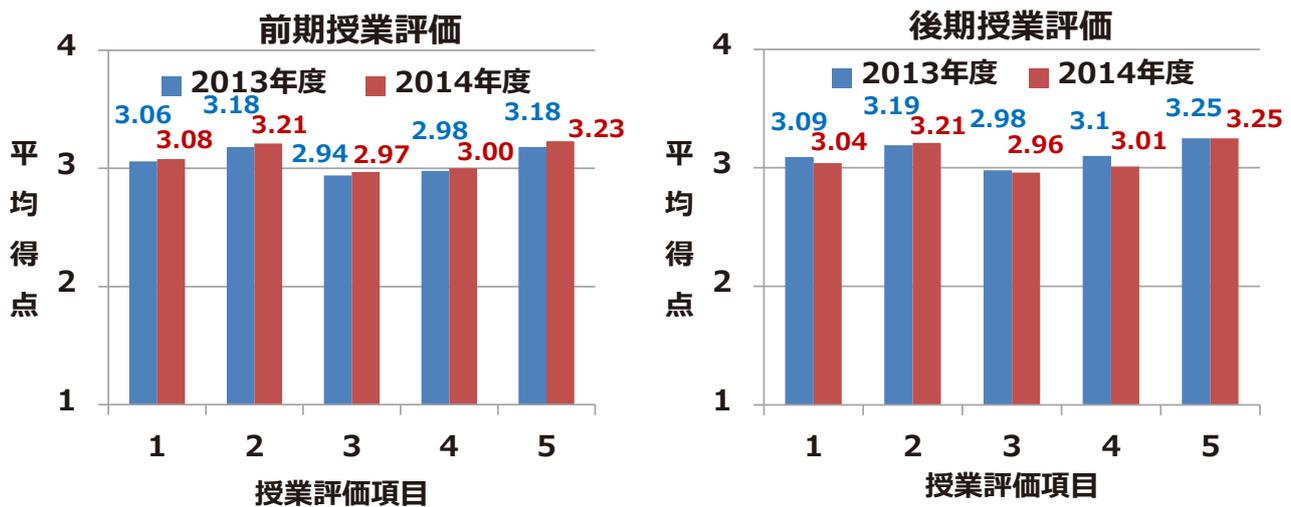


図 2013年度と2014年度の前期および後期の海洋生物資源学部の授業評価結果

1点が低い評価、4点が高い

授業評価項目 1. 授業意欲；2. 授業方法；3. 内容理解；4. 関心；5. 総合評価

#### 授業評価に対する学部からの意見

FDは基本的に授業方法や授業内容を評価することを目的としているのではなく、学生の理解を深めたり、関心を高めるための授業改善をめざしたものである。授業評価という名称を改めて、本来の目的が明瞭になるようにする必要がある。また、上述したように、改善方法を深化させるためには教員のコメントに対する学生の反応もアンケート等で集めるとよいと考えられる。

### 2.3.2 授業公開の方針と実績

#### (1) 方針

授業を公開することにより、ふだん発表者が気付かない改善を必要とする部分を抽出できるだけでなく、他教員の講義を参観することによって、講義の進行方法などを客観的に分析することができ、参観する教員の授業改善の手段としても役立つことができる。さらに、参加教員が講義に関して問題点や改善アイデアを議論し、それらを共有できる機会も提供できる。以上の点から、授業公開は講義の改善に有効なツールと考え、海洋生物資源学部で実施することにする。

2011年度から2013年度では、授業公開は年1回であったが、2014年度は前期と後期にそれぞれ1回、合計2回実施した。この理由として、年1回だと参加できる機会が制限されることと、継続性の面から考えると2回程度が適切であると判断されたためである。また、授業参観のあとに意見交換会を実施した。前期の授業公開では講義の進捗状況から90分講義を行い、その後メール会議で意見交換を実施した。後期は、60分の講義後に、30分意見交換した。意見交換では、授業方法や進め方に関して主に議論したが、今後のFD活動や授業公開の方針に関しても意見を集約することができた。顔を合わせて議論することで議論が一方通行にならず、理解を深めることができた点は有意義であった。

## (2) 実績

上述したように本年度は2回の授業公開を実施した。参加教員数は海洋教員24名中、前期が10名、後期が11名で、両方の授業公開に参加した教員は6名、どちらか一方に参加した教員は11名であった。海洋生物資源学部の教員の参加割合は70.8%であった。このように70%以上の教員が授業公開にかかわり、さらに議論も行われており、授業改善の有効なツールとして位置づけられている。

### [前期]

公開科目名：海洋動物培養学（3年次生）

担当：田原准教授

公開日時：2014年7月15日（火）9:00～10:30

場所：M204 教室 講義（9:00～10:30）

講義後の意見交換会 メール会議

参加人数：10名（海洋生物資源学部の教員数24名）

松川・吉川・神谷・佐藤・東村・加藤・宮台・高尾・末武・富永

参加者の意見は以下の通り。

#### 1) 工夫されている点、参考になる点

- 話す内容を最初に板書すること
- 黒板の使い方、向かって右側の3分の1を使わない
- 実際の養殖現場の話をしながらか、授業を進めるのは興味が持続されてよい
- スライドで全体像を俯瞰させつつ重要箇所については更に板書することで、情報が咀嚼しやすくなると感じました。
- 公務員試験で出題される、といった情報は学生にとって特に有益かと思えます。
- 毎授業ごとに質問を書かせて、次週の授業の時に質問に対する回答を示すのはとても良いと思いました。
- 板書の字がきれいで読みやすいと感じました。
- 声が大きくて聞き取りやすかったです。
- スライドが見やすい。
- 非常に分かりやすい講義でした。ややゆっくり目に感じたが、学生は確実に理解出来ていると考えられるスピードでもあろうとも思いました。
- 板書の後に学生がノートを書き写す時間を取っているのは良いのですが、スライドと重複するものが多いのはやや気になりました。板書は講義の緩急を付けるのに有効だと思うが、そこまで板書の時間を取る必要があるのかなとは思いました。ただ、私は学生から板書を取る時間が短すぎると指摘されたことがあり、今の学生は、「話を聞きながらノートを取る」ということが出来ない様なので、田原先生のスピードの方が合っているのかもしれないと自問自答中です。
- 出席カード自体も良いし、配付のタイミングも良かったです。ただ、最後の方だけ出席した学生も「出席扱い」になるのはやや疑問に思いました。
- スライドの中で暗い背景に黒文字は、やや見づらい気がしました。

- 説明が丁寧でわかりやすかったです。
- 適度な板書がされていると感じた
- 質問カードを作ることで、出席を取ると同時に授業に学生を参加させることができる点は参考になった
- 毎回改善点をあげてもらえることで、迅速な改善ができ効果的

## 2) 改善したらよいと思われる点

- スライドの書かれている文字や写真の一部が小さくて、判別しづらい
- 板書している時間とスライドを説明している時間が別れているので、板書の一部はスライドの説明の間に入れても良いのではと感じた。
- ビデオ再生時、特に注意して見るべきポイント等の解説が事前にあると、学生の集中力・理解度が増すと思います。例えば今回の場合、冒頭付近のモジャコ採集のシーンについて動画再生の後に言及がありましたが、見落とした学生もいたかもしれません。
- スライドやプリントに書かれている内容を改めて板書するのは、学生に重要性を分からせるためかと思いますが、表現を変えるなど、もう少し工夫があっても良いように感じました。
- インターネットや本から引用した図によっては、説明の字が小さかったりかすれたりしていて、読みにくいものがありました。
- 餌や稚魚の大きさを比べるときは、縮尺を同じにして示す方が違いを実感しやすいように思いました。
- 時間がなかったため割愛したのですが、餌料と飼料の違いや、環境改善の話を書きたかったです。
- 進行上の重複があり、その時間学生に背を向けた状態で無言なのでここがポイントであるとか話をしながらでもいいのではないかと思います。
- 当日話す内容をトピックで最初にまとめると学生の理解と講義への参加を準備させる点で効果的でないかと思う

## 3) その他意見、感想

- 授業終了 20 分前に学生が、入ってきたがその学生の出席についてどのような扱いにするのかが気になった。
- 日本は多くの水産資源を輸入に頼っているかと思います。国内だけでなく海外の現場における資源管理や育種についての問題点や取り組みについても紹介があると、より視野が広がって良いと思いました。
- 残り 15 分になって遅刻してきた学生がいましたが、出席の扱いにするのでしょうか。
- ・今回は授業公開の後の討論会がありませんでしたが、都合が付く人だけ集まって 2 限目にやるという選択肢もあったのではないのでしょうか。
- 田原先生の講義だけでなく、授業公開の際には教員にも配付資料を配って頂きたいです。
- 出席カードに書かれた「改善箇所」で改善のしようがないというか、むしろ学生の方が問題だと考えられる場合には、どの様に対処されているのか知りたい。
- パワーポイントのスライドと同じことを板書に書き出していたが、ポイントだけではなく、ほぼ文章そのままに見えました。その辺の意図がぜひ知りたいです。

- 質問カードにどの程度の記述があるか知りたい
- 質問への回答は、講義最初の説明以外で学生に知らせているか知りたい

[後期]

公開科目名：魚類学（2年次生）

担当：青海教授

公開日時： 2015年1月16日（金）10：40～12：10

場所：M204 教室 講義（10：40～11：40）

講義後の意見交換会 小浜キャンパス 1F 会議室（11：40～12：10）

参加人数：11名（海洋生物資源学部の教員数24名）

神谷・佐藤・水田・細井・大泉・横山・小北・兼田・加藤・末武・富永

参加者の意見は以下の通り。

1) 工夫されている点、参考になる点

- スライドに図が多く、わかりやすい
- 質問カードを毎回、回収している
- 資料がLMSに掲載されている
- 話し方が、ゆっくり、ていねいで、理解しやすい
- 話すスピードがゆっくりで聞き取りやすい講義であった。
- 学生の理解度を把握するためにレポートを上手に利用しており、とても参考になった。
- 出席カード、レポート、試験をうまく組み合わせ、学生の講義への関心を高めようとしていた。
- 質問カードは良い方法だと思った。
- 文字と写真、図とのバランスが良い。
- すべてを説明するのではなく、要点を説明しているのでテンポが良い。
- 言葉遣いが丁寧である。聞き取りやすいスピードで話している。
- 話し方がゆっくりで、学生の興味を引くような例や話題を交えながら説明されているのが良いと感じました。
- 質問カードや講義中の問いかけなど、双方向授業を心がけている点も、勉強になりました。
- 質問カードで、感心するような質問がいくつもあり、熱心に受講している学生がいることを実感しました。
- ゆっくりと話しており、学生が理解しやすいと感じた
- 質問カードは、学生が講義に参加していることを実感させる点でも非常に有意義。自分で質問を考えることは、課題の抽出につながる。

2) 改善したらよいと思われる点

- ポイントだけでも黒板に書いた方が、学生が授業に集中するし、あとで資料をみても理解しやすいのではないのでしょうか。
- ノートを取る姿勢は学生によって差があったように見えた。黒板で大切なポイントを明示する機会を少し増やすとよいかもかもしれない。

- スライドで示したグラフや表の解像度が低く、一部の文字が見にくいように感じましたが、これらの図がすべて配布プリントで確認できるのであれば、問題ないかと思えます。
- やや情報量が多いと感じた。

### 3) その他意見、感想

- 学生のノートはどうなっているのか興味がある。
- 提出させた授業レポートや質問ノートは、どのように採点し、評価しているのか興味があります。
- 講義の分量や情報量がかなり多いと感じましたが、学生はこれらの内容をきちんと消化できているのでしょうか。
- 豊富な知識と経験に裏打ちされた授業で、学生が興味を持てるのではないかと思った。
- 表情やジェスチャーなども工夫されており、伝えようとする気持ちが感じられた。
- 「何でもカード」に書かれた質問に対する丁寧な説明や授業中の発問など、学生とのコミュニケーションを図り、双方向型の授業になるよう工夫されていた。
- 質問カードなどの工夫は非常に参考になる。学ぼうとする学生には優れたツールであるが、学ぼうとしない学生はどのように対応するかも考える必要があると感じた。
- 質問カードを評価に生かしているかという点と質問に関して学生にある程度の解答も用意してもらおうとよいと思った。

## 2.3.3 部局内FD研修

### 1. 海洋生物資源学部主催のFD研修会

日時：2014年6月13日(金)

会場：福井県立大学小浜キャンパス TV講義室  
福井県立大学福井キャンパス TV講義室

参加者：小浜キャンパス 15名、福井キャンパス 6名

テーマ：聴覚障害の理解を深めるために

講師：五之治多美・常田紀章(小浜)、坪田節子(福井) 福井県立ろう学校教育支援部

### 概要

本研修は小浜キャンパスから福井キャンパスにTV講義を通して発信した。講義にはゲームや道具を用いた実演があるため、3名の先生は小浜キャンパスに2名と福井キャンパスに1名に分かれて参加された。研修会の内容は以下の4点で構成されていた。

- 1) きこえや難聴の種類・早期対応の大切さ
- 2) 聞こえを補うものについて
- 3) 聴覚障害の困難性について(難聴疑似体験)
- 4) 情報保障と支援について

1) では、基本的な難聴の特徴と聴覚障害者の聞こえ方そして難聴によりどのような問題が生じるかについて説明があった。2) では補聴器の種類について紹介され、補聴器は眼鏡と

違い、音を大きくしても音の歪みが残ったり、聞こえる範囲や音を聞き分ける限界があることが説明された。聴覚障害は目や手足の障害と異なり、まわりの人が気づきにくい（気づかない）点は、改めて納得させられた。3) では参加者が聴覚障害を疑似的に体験するという時間を作っていただき、4) ではコミュニケーションの方法と情報保障について説明があった。情報保障とは平等に情報を得る権利を保障するという点で、技術的方法として、補聴器、筆談・要約筆記、手話・指文字、読話（読唇）などがあることが示された。重要な点は、聞こえない人が皆手話ができるわけではないことを理解することであるという点も強調されていた。

最後に学校で行う支援方法が説明された。学校で考えられる苦手なこととして①まわりがうるさいと聞こえない、②同時に話されるとわからない、③スピーカーの音は聞き取りにくいことがあげられた。教える側としての注意点としては、①離れて話さない、②後ろから話さない、③聞くことには集中力が必要なため、長時間は疲れて聞き漏らすことがある、④補聴器なしの時はほとんど聞こえないことがあげられた。講義中には板書と話者の両方を見やすくするなどの工夫が必要であることも指摘された。これら以外として、緊急時の配慮や精神面への配慮もしなくてはならないことが理解できた。

今回の研修会は、一見特別な内容に思えるが、教育支援面でも学生の理解を困難にしている事柄を具体的に検討することなどは共通していると考えられる。また、一般学生が将来、社会に出て多様な人たちとかかわるうえでも貴重な内容を含んでいることから、学生を対象とした研修会も実施することが望まれる。

## 2. F レックス FD 合宿研修会

日時： 2014年 9月4日（木）～9月5日（金）

会場： 福井県立大学

参加者： 宮台俊明（4日参加）、富永修（5日参加）

テーマ： 教学 IR と LMS

感想： 今回の FD 合宿研修会では2日目のテーマである「改めて LMS-活用事例紹介」の演者として発表する機会を与えていただいた。私はコンピューターを得意としていない（苦手）ため、当初は四苦八苦して LMS に取り掛かった。しかし、自分が最低限使う機能だけを利用しようと思って、あらためて LMS を利用すると、簡単で非常に便利なものであることがわかった。他の発表した先生の利用方法を理解することが難しかったが、最低限の使用でも学生との双方向のやりとり、学生への教育支援ができることがわかった。なによりも私レベルのコンピューター利用者でも LMS を使える（決して使いこなしていません）ことを報告できたと思っています。本学教員に LMS を利用してもらおう切っ掛けになれば大変うれしいことです。（富永）

### 2.3.4 昨年の授業改善についての課題への対応

#### 1) 海洋生物資源学部における今後の FD 活動方針

2013 年度の課題

- ▶ 学部内での F レックス FD 研修会開催の周知方法を改善して参加者を増加する

- ◆ FD 研修会に参加した先生が簡単な報告会を行い、次回の研修会への参加を促す（学部教授会や授業公開のあとの意見交換会の時など）
- ◆ 高校の先生に授業を公開して意見を求める
- ◆ 高校の先生の授業を見学する機会を作る

#### 2014 年度の対応

F レックス FD 研修会の周知は学部メイリングリストや教授会を通して複数回行った。しかし、本年度の参加者は 2 名と昨年と変わらなかった。ただ、FD 合宿研修ではワークショップで海洋からの発表があり、昨年よりは積極的な参加となった。

### 2) 海洋生物資源学部からの FD 活動の提案

- 教員に対する社会の要望を聞くセミナーの開催

「2.3.3 部局での FD 研修」で記述したように、本年度は海洋生物資源学部主催の FD 講習会を実施し、TV 講義を通して福井キャンパスでも参加できるようにした。

## 2.4 看護福祉学部（平井 一芳、吉弘 淳一）

本年度実施した授業評価、授業公開、授業改善への取り組み、FD 研修、授業改善についての課題と展望を以下に報告する。

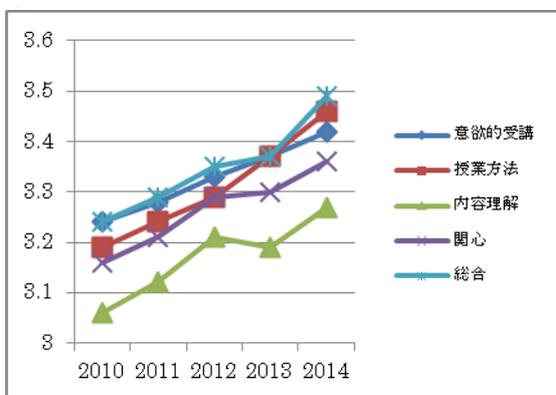
### 2.4.1 授業評価

#### 2.4.1.1 看護学科

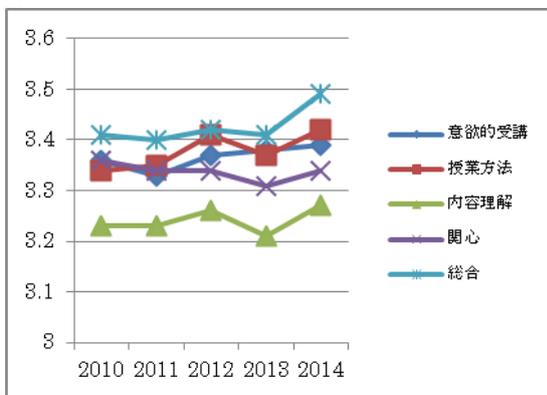
授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期後期とも「意欲的受講」、「授業方法」、「内容理解」、「授業への関心」すべての項目が上昇した。

次に過去 5 年間の推移をみてみると、2013 年に前期の「内容理解」、後期の「内容理解」と「授業への関心」が若干低下したが、前期後期とも総じて上昇傾向であった。また、項目別得点においては、前期後期の何れの年度も「意欲的受講」と「授業方法」は高く、「内容理解」が最も低かった。

以上のとおりアンケート結果からみた授業評価は、概ね良く特段の変化がないと言える。



看護学科 授業アンケート結果（前期）

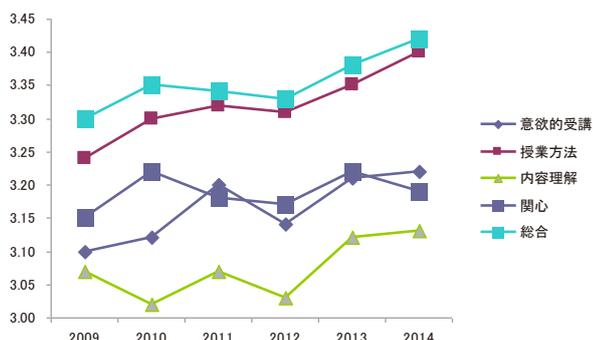


看護学科 授業アンケート結果（後期）

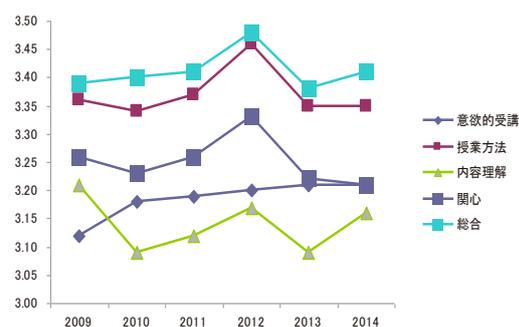
#### 2.4.1.2 社会福祉学科

授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期は、「関心」において少し下降したが、後の項目全てにおいて上昇している。また後期についても「関心」が少し下降したが、後の項目は昨年と同様か上昇している。「関心」という項目が昨年と比較すれば前期後期において少し下がっている。「総合」は、前期後期とも昨年より、上昇している。6年間（2009年度から2014年度）のすべての項目の得点レンジはほぼ3.0～3.5であり顕著な傾向は見受けられない。

以上のとおり学生アンケート結果からみた授業評価は、総じて良く特段の変化がないと言える。



社会福祉学科 授業アンケート結果（前期）



社会福祉学科 授業アンケート結果（後期）

## 2.4.2 授業公開

### 2.4.2.1 看護学科

看護学科では例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しないのは、看護学科はオムニバス授業や学外実習が多く時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。このことは残念ではあるが、看護学科独自の授業改善への取り組みが行われているので、以下（2.4.3.1）に報告する。

### 2.4.2.2 社会福祉学科

社会福祉学科では、例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しない要因として社会福祉学科は学外実習（ソーシャルワーク実習、精神保健福祉実習）や演習科目が多く時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。また現状として社会福祉学科独自の授業改善への取り組みが行われているので、以下（2.4.3.2）に報告する。

## 2.4.3 授業改善への取り組み

### 2.4.3.1 看護学科

#### (1) 「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」活動報告

看護学科の授業は、演習など複数の教員がかかわることが多いので、担当する教員同士で授業について検討を行う機会がある。そのような機会には授業方法についての話し合いが行われている。特に臨地実習においては、学生の思考・判断・行動を教員は目のあたりにするので、自ずと授業を振り返ること、授業改善へと繋がっていく。

看護学科では2012年度から教員有志で「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」を発足し、「看護実践能力とは何か」、「教育的支援とは何か」について、実際の臨地

実習における指導場面をもとに検討している。今年度の検討結果を以下にまとめた。

#### 1) 平成 26 年度活動報告について

開催回数は 3 回で前年度に比べて減った。その要因として、今年度から臨地実習の単位数が 2 単位増えたことで実習のインターバルを取らなくなったことで、開催日時の調整が難しくなったことが考えられた。

その中で、一人の教員から話題提供があった指導場面を資料として 3 回に渡って参加者で検討を重ねた。検討した結果、実習をとおして学生の看護実践能力が向上していると評価した。その能力を引き出すには、教員はまず看護者として学生が受け持つ患者を捉える力が必須であり、教員は学生が受け持つ患者を捉えて学生に関わることにより、学生に必要な教育的支援や評価を行うことができることを確認し合えた。

#### 2) 平成 26 年度看護福祉学部 KF 枠研究費による研修会開催について

看護学教育における指導過程を分析し、指導力をつけることを目的に、2015 年 3 月 8 日(日) 13 時 30 分から 17 時まで、看護福祉学部棟 2 階 201 多目的演習室において看護福祉学部看護学科教員を対象に研修会を開催した。参加者は 14 名。前年度と同じく千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部教授和住淑子氏に講師をお願いした。

前年度、様々な参加者の学習ニーズに応じ切れない展開であった反省を踏まえて、今回は開始時に、参加者各自が参加動機を明らかにし、参加動機の類似する参加者でグループ編成して始めた。講義、グループワーク、質疑応答、講義、ロールプレイ、質疑応答という進行方法をとった。終了時、参加動機に照らして学びの自己評価を行った。アンケートの結果、研修会に参加して「とても満足」9 名、「満足」5 名であり、「参加動機が解決した」、「実習指導の軸が明確になった」等、自己評価していた。(文責：赤川 晴美)

#### (2) 各領域における取り組み

看護学科では、各領域において独自の取り組みが行われており、今年度は基礎・在宅・精神の 3 つの領域で行われている取り組みについて以下に報告する。

##### 1) 基礎看護学領域

基礎看護学の授業全般において、学生の主体的な学習を促すため、基礎知識・演習内容に関する予習を課しその予習内容を活かす授業を展開した。單元ごとの「講義・教員によるデモンストレーション・演習」では、内容のつながりを明確にするとともに、臨床事例を適宜紹介しながら看護への関心が高まる授業に努めた。また、本年度より「対人関係の技術」の授業の中で、学生一人一人に「パーソナルポートフォリオ」を作成してもらい、自己理解・他者理解を深める取り組みをしたところ「やって良かった」と好評であった。

(文責：笠井 恭子)

##### 2) 在宅看護学領域

学生にとっては、在宅看護に関する知識の少なさからイメージが描きにくいという状況であったことから、教員自身訪問看護師であった経験も踏まえ、具体例をまじえて解説したり、DVD や画像など視聴覚教材も最新の物を活用した。また毎回の講義後、感想や疑問点を所定の用紙に書かせ、翌週の講義ではそれについて解説し、なるべく早期に疑問点を理解できるように努めた。さらに現役の訪問看護師をゲストスピーカーとして招聘し、在宅ターミナル

の看護の実際について語ってもらい、理解を深める工夫をした。 (文責：普照 早苗)

### 3) 精神保健学領域

担当科目は、「精神保健Ⅰ」「精神看護学概論」「精神看護学Ⅰ」「精神看護学Ⅱ」「精神看護学実習」「卒業研究」であった。「精神保健Ⅰ」では、シラバス内容を全面改訂し系統的な内容で授業を行った。「精神看護学概論」「精神看護学Ⅰ」「精神看護学Ⅱ」においてもシラバスをできるだけ系統的な授業体系となるよう改訂し、毎回の授業で学生の意見や確認テストを行い授業内容の調整と学生の理解度を確認し授業を行った。「精神看護学実習」では、学生の反応を考慮しながら精神障害者への看護の基礎について学生の学びを支援した。 (文責：村松 仁)

#### 2.4.3.2 社会福祉学科

社会福祉学科は実習、演習教科を含めてオムニバス授業が多く、担当する教員間において授業内容等、検討を行う機会がある。特に実習、演習教科では複数の教員間の連携が必要となり、授業方法等についての話し合が行われている。特に実習については、学外施設、機関等専門職者との連携を密にすることが学生の学習に対する意欲を引き出すことにつながることもあり、年に1回、実習指導者を本学に招いて、講演会と連絡等の会議を行っている。学内では、ソーシャルワーク実習担当者会議、精神保健福祉実習担当者会議を毎月開催し、年に2回合同での実習担当者会議も行っている。学生の今の状況を教員がいち早く察知し、実習を通して系統的に学生を観ていくためにも教員間の情報の共有が必要と考えている。また学生一人ひとりの個性を活かしつつ、専門職者として必要な知識、技術の向上を目指し、個人面談を実施しながら学業等に意欲を持たせる試みをしている。

社会福祉学科の授業科目には、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験の受験資格に関わるものが多く、資格要件の変更に応じて、実習施設や実習時間、授業科目の変更や組み替えを実施する必要がある。学科内にカリキュラム検討委員会を組織し、隔月程度のペースで会議を開催しており、そこで教育効果を高めるためのカリキュラムの構成の仕方や授業方法について、検討が行われている。またカリキュラムの変更に際しては、ワーキンググループの報告を受け、学科の全教員が参加する学科会議で意志決定する必要がある。ここでも教育効果を高める授業の進め方について話し合う機会がもたれる。特に具体的に今回は「ソーシャルワーク実習指導」の改訂が行われた。社会福祉士国家試験受験資格を取得するための指定科目「ソーシャル実習指導」において厚生労働省、日本社会福祉士養成校協会による「相談援助実習・実習指導ガイドライン」を踏まえ実施することを原則とし、カリキュラム(内容・時間数等)を再構成した。

社会福祉学科は、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の養成に関わっているため、社会福祉士養成校協会、精神保健福祉士養成校協会、社会福祉学校連盟、公立大学協会社会福祉学系部会などに加入し、部会や連絡会議、セミナーなどに定期的に参加している。具体的には、それぞれの担当者を決定し、学科の代表として各種の部会、セミナーに分担して参加している。こうした機会にFDに関わる議題が取り上げられたり、FD関連のセミナーが実施されたりすることがある。FDに関連する部会、セミナーの個別の内容については(2.4.4.2)に報告する。そこで得た知見は持ち帰って学会会議で報告され、教員間で知識の共有が図られる

とともに、それに関する話し合いも行われる。

また、教員有志の学習会（「教員懇談会」）を開催することになり、学生への教育効果を高めるための情報交換とディスカッションが活発に行われている。昨年度の懇談会は、8月6日（水）17:00-18:30に開催され、12名の教員が参加した。特にこれからの社会福祉学科がどのような体制でどのような理念の下に進んでいくかを他大学での状況を踏まえ多角的な視点で意見交換を行った。

## 2.4.4 FD 研修

### 2.4.4.1 看護学科

第5回 FD 合宿研修（2日間）

日時：2014年9月4日（木）13:00～17:20、5日（金）9:00～12:00

会場：福井県立大学

主催：Fレックス

初日プログラム：大学教育の質保証に向けた教学 IR の開発－RQ に基づくモニタリング

（立命館大学 鳥居 朋子先生）

Fレックスにおける教学 IR の取り組み（福井県立大学 徳野 淳子先生）

RQ づくりから始める大学教育改善（立命館大学 河井 亨先生）

2日目プログラム：LMS 活用事例紹介－文系・理系・語学系それぞれにおける実践例

参加者：有田 広美、普照 早苗、澤田 敏子、梶 瑞紀、平井 一芳

所感：

●研修参加の目的は、そもそも「教学 IR、LMS」というものがどういうものであるのかという基本的知識を学ぶためであったが、各大学の報告者より、具体的な取り組み報告があったため、大変参考になった。システムとして現在の自分の活動に取り入れるというよりは、今回、基本的理念を学べたことから、将来的に自分の専門分野にどう活かすかという視点を常に持ちながら今後の活動に取り組んでいけると考えた。

2日間という研修形態も負担なく参加でき、とりわけ他大学、他分野の参加者とのグループワークにより、現状での各方面の課題についても知ることができ、大変興味深い研修となった。今後もこのような機会があれば、同様の研修に参加したいと考える。

（文責：普照 早苗）

●本研修会の講義とワークショップでは「教学 IR、LMS」についての基礎的知識を学べ、各大学の取り組みやそれぞれの分野の先生方の活用事例をご報告いただき、たいへん参考になった。また、懇親会では他大学、他分野の先生方と情報交換ができ、2日間、有意義な研修会であった。本研修会を終え、根拠に基づく大学教育の質的保証が重要な課題であることを再認識した。

大学が提供している学習システムは学生の学びの実態に即しているかどうか、エビデンスに基づいてモニターし、学生の学びの実態の科学的アプローチが必要と考える。そのためには、まず、具体的教育改善へ結びつけるための視点として、学生意識調査の分析結果から学びの実態を可視化することであろう。そして、実態に基づいた改善方策の検討を進めていくことが望まれる。

今後も機会があれば、同様の研修に参加し、学部の実情に合わせた「教学 IR、LMS」の提

案、実施をしたい。

(文責：平井 一芳)

#### 2.4.4.2 社会福祉学科

2014年度 全国社会福祉教育セミナー参加報告

日時：平成26年11月1日(土)～2日(日)

場所：日本福祉大学美浜キャンパス

本学参加者：木村、永井、奥西

研修内容：教育セミナー 全体テーマ「生活困窮・地域自立生活支援をめぐる社会福祉教育の拡がりと核心」

第1日目(11/1)

基調講演「地域自立生活支援とコミュニティソーシャルワーカー—社会福祉教育・研究は時代の趨勢に追いついているか—」

東北福祉大学大学院教授・日本福祉大学客員教授大橋謙策教授

地域福祉の時代において、行政・住民協働論、地域ケアにおける多職種連携の重要性が強調されている。このような場(枠組み)において、ソーシャルワーカーはどのような役割を果たしていくのか、対象に対する固有の視角とアプローチの方法をソーシャルワーカーは持ち得ているのか、と講演の冒頭に問われる。社会福祉における「自立」の考え方の見直しとコミュニティソーシャルワーク機能の発揮が求められている。

人間性を尊重した自己実現(憲法13条幸福追求権)に基づくソーシャルワーク、当事者の主体性に働きかけるソーシャルワーク支援である。とりわけ、「新たな支え合い」づくりを進めるための触媒機能としてのコミュニティソーシャルワーク機能である。

社会福祉教育に照らして言えば、社会福祉教育・研究の学科目を超えての共同研究体制化、社会福祉踏査実習(生活の息吹の体得、問題発見能力、サービス開発等)の復権を強調される。専門多職種連携・協働と社会福祉教育・研究の今後の課題としては、①医療・保健と社会福祉の連携(地域包括ケア)、②司法との連携、③教師、特別支援教育担当教師との連携、④福祉用具相談員との連携、⑤地域自立生活支援における住民との連携、をあげられる。最後に、個別問題解決のソーシャルワーク実践からシステムとしてのソーシャルワークの展開及びサービス事業体の起業・経営(介護ビジネス・障害者支援ビジネス・子育て支援ビジネス)と社会福祉教育のあり方についての課題を提示された。(文責：奥西)

シンポジウム テーマ「生活困窮者自立生活支援の政策と実践—社会福祉教育への期待—」

シンポジスト：厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室長：熊木正人氏

豊中市社会福祉協議会事務局次長：勝部麗子氏

明治学院大学教授：新保美香氏

コメンテーター：ルーテル学院大学教授 和田敏明氏

コーディネーター：日本福祉大大学教授 原田正樹氏

冒頭、コーディネーターの原田正樹教授より、シンポジウムの主旨について解説があった。生活困窮者自立支援法の制定を経て、2015年度より各地で自立相談支援事業が始まるが、この新制度の理念や概要を踏まえて生活困窮や社会的孤立、社会的排除に立ち向かうソーシャルワーカーの養成が社会福祉系大学にとって重要な使命である。

厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室長、熊木正人氏より、まず、生活保護制度の見直しと新たな生活困窮者対策の全体像について報告があった。支援員に求められることは、本人の寄り添いながら的確なアセスメントを行うこと、本人支援を行いながら、地域ネットワークの構築に向けて行動すること、包括的な支援を提供しながら就労支援をおこなうことである。制度に精通しながら、制度の狭間に置かれた人への支援を考えられる人材の養成が求められていることを報告された。

次に、豊中市社会福祉協議会事務局次長、勝部麗子氏より、まず、ご自身の大学時代の社会福祉教育について述べられた。特に、住民インタビュー調査によるフィールドワーク、ボランティア活動、教育実習、福祉実習から学んだことが少なくなかった。

その後、豊中市における実践活動の紹介があり、生活困窮者に対する伴走型支援の実際の展開過程について報告された。実践者の立場からの学校教育への期待として、生活困窮・社会的孤立は福祉のすべての基本であることを念頭に、個別相談から地域課題を見出す力の養成、人への関心、社会への関心を高めることが重要であるとした。

明治学院大学教授、新保美香氏から、生活困窮者自立支援制度における人材教育に関して、制度目標を確認（「生活困窮者の自立と尊厳の確保」と「生活困窮者支援を通じた地域づくり」）した上で、人材育成の現状について述べられた。さらに、社会福祉教育に期待されることとして、「価値」「理念」を踏まえた実践のできる「謙虚かつ真摯な実践者」の養成、「生活困窮者支援を通じた地域づくり」に貢献する「福祉マインド」を持つ人材養成の重要性を強調された。

フロアとの意見交換の後、コメンテーターのルーテル学院大学教授、和田敏明氏よりシンポジウムでの検討内容の整理と今後の課題がまとめられた。①生活困窮者支援の担い手となるソーシャルワーカーの待遇を安定させ、評価すること、②各科目で生活困窮者支援について教育していくこと、また、国家試験に出題すること、③学部と大学院を通して生活困窮者支援について学び、研究していく体制を整えること、④学生を現場に出して総合相談の場面に立ち合わせることを指摘された。

## 第2日目（11/2）

### 第2分科会テーマ「社会福祉士新カリキュラム施行後5年間の総括と見直しに向けて」

コーディネーター：上野谷加代子氏（同志社大学）

報告者：樽井康彦氏（龍谷大学）、渡辺裕一氏（武蔵野大学）、中谷陽明氏（松山大学）

教育事例報告：巻康弘氏（北海道医療大学）、新井利民氏（埼玉県立大学）

第2分科会では、大きく分けて2つのテーマについて報告がなされた。1点目は、新カリキュラムに関する社養協の全国調査と全国模試の解答データ分析である。報告や討議のなかでは①原論（現代社会と福祉）に関して重要性は高く認識されているにも関わらず、必要性は比較的低い評価になっている点や②模試問題を作成する際に情報量や出典の選定、数値を問う問題の妥当性、適切な用語使用の必要性などが指摘された。2点目は先駆的な実習カリキュラム例としての北海道医療大学、埼玉県立大学の報告である。CBTとOSCEを活用した1年次から4年次までの継続的・段階的な実習の学びや、専門職連携（IPE）実習の取り組みの現状について意見交換を行った。（文責：永井）

### 第6分科会テーマ「ソーシャルワーク新定義の意義と日本の社会福祉教育における課題」

コーディネーター：大和三重氏（関西学院大学）

発題者：秋元樹氏（淑徳大学）、木村真理子氏（日本女子大学）、  
片岡信之氏（四国学院大学）、和気純子氏（首都大学東京）

本年7月に開催された国際社会福祉教育学校連盟(IASSW)および国際ソーシャルワーカー連盟(IFSW)のメルボルン総会において、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の改訂が承認された。本分科会では、今回の改訂に至る経緯として2000年以降のラテンアメリカ諸国（特にブラジル）での議論について解説され、新定義の特色と本年12月に決定する日本語訳の暫定案が発題者より紹介された。

論点としては、①定義を前提として「ソーシャルワークとは何か」と教員が学生に教えるのではなく、「考える学生」を育てるために、教員自身が学生に問いかけ続けるような教育を展開できるよう努力すること、②世界の視点とともに民族・地域に固有の知を重視する「グローバル」な視点がわが国の社会福祉実践と教育に不可欠となること、③現行のカリキュラムでは教える機会が少ない多文化ソーシャルワークや移民の生活問題についても、今後は講義内容を増やす必要があること等があげられた。最後に、2015年10月に開催されるアジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟(APASWE)地域総会において、アジア太平洋諸国の地域定義が策定されるため、日本より発信すべきことへの議論が高まることを期待すると、コーディネーターの大和三重氏により総括された。（文責：木村）

特別シンポジウム テーマ「社会福祉学を学ぶ学生が習得すべき基本的素養と福祉マインドー日本学術会議社会学委員会社会福祉学分科会提言・報告ー」

コーディネーター：白澤政和氏（日本学術会議委員、桜美林大学教授、日本福祉大学客員教授）

シンポジスト（報告）：岩崎晋也氏（法政大学）

（指定討論）：牧里每治氏（関西学院大学）、野口定久氏（日本福祉大学）

特別シンポジウムでは、日本学術会議社会学委員会社会福祉分野の参照基準（案）に関して報告がなされ、災害復興と大学院教育の2つの視点から指定討論が行われた。参照基準の中では社会福祉の定義を改めて整理し、「福祉マインド」というキー概念を用いながら学生が身につけるべき素養を提示している。参加者を含めた全体討議では、①社会正義や社会認識、あるいは社会問題をどのように捉えて学生に伝えていくかという視点をもっと強調するべきではないか、②福祉マインドという用語をこれまでの変遷もふまえた深い意味で使用してほしい、という意見があった。また、参照基準をリライトし、高校生にも理解しやすい表現で伝えていく必要があるのではないか、などの指摘がなされた。（文責：永井）

## 2.4.5 授業改善についての課題と展望について

### 2.4.5.1 看護学科

看護教育には臨地実習が課せられており学生は看護実践能力向上をめざして臨地実習に取り組んでいる。しかし、学生は無資格者であるが、学生の行為が対象者には看護にならなくてはいけないので、教員の教育的支援が必要になる。そのためには、教員の実習指導能力の維持・向上が必須条件である。しかしながら、当看護学科では教員の実習指導能力を向上す

ることと経験ある教員の実習指導能力を若手教員の実習能力向上に役立てる場づくりが課題になっていた。

今年度は、基礎・在宅・精神の3つの領域における授業改善についての課題と展望について、以下に報告する。

#### 1) 基礎看護学領域

基礎看護学の授業はすべてオムニバス授業である。担当教員同士で授業方法や進め方について十分話し合い、理論に基づいた看護と看護の楽しさを伝える教育のあり方を検討していきたい。今後は、生活体験が乏しくコミュニケーション能力が低下しつつある学生に対応するため、独自に作成した事例を多く活用し、臨場感をもたせる演習に取り組んでいきたいと考えている。

(文責: 笠井 恭子)

#### 2) 在宅看護学領域

今年度から着任、担当したことから、今年度と次年度の授業評価を経時的に検討していきたいと考える。そのため、授業スタイルは基本的に変更せず微調整に留める予定である。課題としては、在宅看護にかかわる法制度の理解が学生にとっては難しい様子であったことから、事例を用いてイメージしやすいような解説を試みていく。また、2年次で講義する内容が、他領域の看護や3年次実習にもつなげて考えられるような意識付けを重点的に行っていく予定である。

(文責: 普照 早苗)

#### 3) 精神保健学領域

各担当科目とも、学生の授業への意見と学習理解状況を確認しながら講義展開を行い、できるだけ学生の学習状況の改善に向けて授業改善を行った。多くの学生は、授業への関心と理解度は概ね良好であったが、事前学習(予習)と事後学習(復習)への取り組みはあまり行われておらず、学生の自主的な学習を促進することが課題となった。学生の学習意欲を高め、自主的な学習態度が身につくことが可能となるような工夫を行う事が展望として考えられた。

(文責: 村松 仁)

### 2.4.5.2 社会福祉学科

社会福祉学科は、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の養成に関わっているため、実習、実習指導等の科目履修を希望する学生が多い。その学生が実習に出て様々な現状と出会い、考え悩みそして今後の専門職像を作っていく。その一人ひとりが自分の課題と向き合い解決していくためにも一人ひとりの学生にマッチした環境を教育の中で捉えていくことが必要と思われる。学生が今何が必要で何を勉強すべきなのかを教員のサポートと一緒に具体的な経験の中で探していく環境である。また近年実習を履修しないで卒業を迎える学生も少なからずいる。その学生についても卒業後のことを見通しながら基本的な知識、技術を深め興味を持って履修できるような気持ちを引き出すためにも教員のFD研修等の参加をより促していく。また学生の中には、外見の表情では捉えられない、周りに対して非常に敏感に感情が揺れてストレスとなっている学生もいる。教育の中で学生自身が「悩み力」と「悩み方」「解決への道筋」等を学習しながら学生生活をより充実させたものにするためにも教育(授業も含めて)の工夫を検討していきたい。

## 2.5 学術教養センター（加藤まどか、木村小夜、山川修）

### 2.5.1 授業評価アンケートの結果

〈前期〉

意欲的受講・授業方法・内容理解・関心・総合評価の各項目に関して、昨年度前期と比べたグラフを見た限り、いずれも数値は上昇している。尤も、これはあくまでも部局全体の平均にすぎず、学生も毎年変わっていくわけで、昨年度との比較を以て一喜一憂するような性格のデータではないことは昨年度報告書にも記された通りである。

とりわけ内容理解の項目が昨年度 3.07 から 3.15 へと上昇したが、この原因をつきとめることは難しく、またさして意味があるとは思われない。なお、回収数は昨年より 13 科目増え、回収率は 84.6% である。

〈後期〉

後期に関しても、関心の項目が前年度と同じであった以外は各項目とも数値は上昇しているが、前期と同様、誤差の範囲であると言えよう。前後期とも同じ傾向であることから、今年度の学生による平均値が全体に上がったとも考えられる。なお、通年（前後期）変化を見ると、意欲的受講が 0.03 下がった他はいずれも僅差で上昇している。あえて深読みすれば、一年間で学生（主として一年生）が大学の授業に少し慣れてきたということであろうか。回収率は昨年度比で教員単位では 3.5% 下がったが、科目数は 10 科目増加、科目単位の回収率は 3.5% の上昇で 83.9% となっている。

例えば前年度の授業内容がやや高度であったことを省み、翌年には理解度の低い学生に内容を合わせて達成目標や評価水準を下げれば、内容理解の数値はいくらでも上げることができよう。そして、過去数年間の動向を概観すると意欲・内容理解・関心の相関度が高いので、これらの数値も上昇するかも知れない。しかし、そのような傾向がもし奨励・助長されれば、大学教育の意味が失われ、教員側の授業改善への意欲は削がれる恐れがある。数値目標偏重は授業内容の質の向上とは無関係であるどころか、これを低下させるものだろう。授業評価の数値そのものはあくまでも個々の教員が自身の授業を省みる契機のひとつとして、授業改善のための材料とすればよいものであると考える。

### 2.5.2 授業公開の方針と実績

今年度も学術教養センターでは、授業を常時公開としている。

ただし、本学の時間割では基本的に一般教育枠が定められており、自身の授業時間中に他の教員の授業を参観することはかなり難しい。のみならず、授業準備や提出物の処理・学生指導、多くの会議等、業務の合間をぬっての授業参観が容易ではない勤務事情であることは、昨年度報告書にも記された通りで、各教員は一層多忙を極める状況にある。その根源には、諸々の〈目に見える〉成果を性急に要求する昨今の時流があるようである。こうした状況に鑑み、学術教養センターでは授業参観への積極的な参加を呼びかけると同時に、これが決して形骸化・マンネリ化したものとならぬよう、教員と授業そのものがこれを切実に必要として自然発生する機会をまず尊重したいと考える。

既に 2010 年度の報告書等でも指摘されているように、こうした機会のひとつとして、複数分野にわたるオムニバス授業がある。今年度は参観後の意見交換の場こそなかったものの、

次に挙げる授業では、主たる担当教員と共にコーディネーターが全体の見通しを立てて授業を編成し、各教員の授業を参観した。

科目：現代人権論

担当教員：片山智彦・加藤まどか・木村小夜・小林嘉宏・島田洋一・清水聡・塚原典央・徳野淳子

（社会福祉学科から、北明美・舟木紳介・吉川公章、外部講師として斉藤万世（福井県子どもNPOセンター）、藤野明美（goo! goo! の会））

日時：2014年10月7日～2015年2月3日（後期火曜5限）

参観者：片山智彦・加藤まどか 他

ほぼ全回を参観したコーディネーターは、授業内容と方法について次のように記している。「現代人権論」の授業をオムニバス形式で行ったのは、今年度が初回であったため、教員による授業参観が多くなされた。初回の片山先生の授業、第2回の塚原先生の授業では、それぞれ数名の教員が授業を参観した。また外部講師（goo! goo! の会・代表の藤野氏）の回にも、他の教員が授業を参観した。「現代人権論」の授業の中心的な担当者である片山先生と、事務的なとりまとめを担当した加藤は、ほぼ全回の授業に出させていただいた。

各回の授業は、法律・哲学・社会福祉・心理学・文学などの様々な分野を専門とする教員が担当した。人権の法的な視点からの検討、哲学的な視点による人権の根拠についての検討、社会福祉援助実践場面での自己決定と権利擁護についての考察等、それぞれの専門分野から人権へのアプローチがなされ、興味深く聴講させていただいた。また、いじめ・デートDV・性暴力・ハンセン病患者の隔離政策といった深刻な問題が、各回のテーマとして取り上げられたが、それぞれの問題を通して人権の本質に迫るような内容となっており、大変感銘を受けた。

授業のやり方としては、パワーポイントを使うもの、資料を配布して行うもの、パワーポイントで説明しながら資料の空欄に記入させるものなど、多様な方法がとられていた。他にも予め録音した音声を使用したり、DVDを視聴したり、書画カメラを使ったり、朗読劇形式で読み合わせをしたり（外部講師の回）と、それぞれに工夫がなされており、聴講させていただいて、とても参考になった。自分の授業の中にも、取り入れられるものは取り入れていきたい。」

科目：イスラーム史

担当教員：横内吾郎（非常勤）

日時：2014年11月19日（水）4限

参観者：松本涼

参観者の感想は次の通りである。

「自身が担当する「西洋史」でもイスラーム世界との接点は常にあるため、イスラーム史への理解を深めたいと思い、イスラームの社会や文明についての講義を聴講した。とくに、近代以前にはヨーロッパよりも優れた技術や知識の発展を経験していたイスラーム世界が、なぜ近代以降にヨーロッパに遅れをとるのかという問いかけが興味深かった。一つの答えとして、イスラーム世界は次第に神の教え以外の知識を排除するようになるという説が示された

が、このような問いはヨーロッパ史との比較も可能であるため、今後の授業に生かしていきたい。」

教員はまず自分の専門に隣接する分野への関心が強い。したがって、それがどのように教えられているかを参観するにあたっては、問題設定や重点の置き方といった内容的側面に注目せずにおれないわけで、これは授業改善の問題が単なる技術の改善にとどまらないレベルのものであることを示唆している。学生から知的関心をいかに引き出すかという課題は、教員が何を伝えたいか・伝えうるかという内容そのものと不可分であって、そこには教員の研究内容や性格・日々の研究へ向かう姿勢が深く関わってくる。

科目：文学概論

担当教員：木村小夜

日時：2014年6月16日（月）3限

参観者：長岡亜生・松本涼（経済学部より、原田政美・新宮晋）

この授業ではゲストスピーカーとして飴田彩子氏（FM福井アナウンサー）を招き、桜桃忌にちなんで太宰治作品二編の朗読会と作品解説を行った。授業改善を目的とした公開ではないが、期せずして他学部も含めて4名の教員（さらに職員2名）が授業を参観し、「朗読は読み手の解釈によってのみ可能になると認識した。」といった朗読という表現・受容形態に立ち入った興味深い感想も提出されている。こうした発見を後の授業内容に取り込みつつ、講義は進められた。

言うまでもなく授業改善への努力は、個々の教員が自身の授業の前後に厳しく自らを省み、個々の学生の理解度を確認していくことによって日々たゆまずなされているもので、これを計量的に示すことは出来ない。とりわけ基礎教育は、専門教育に向かうための地盤固めや個々の学生に即した関心の裾野を広げる役割を担う以上、即効性や目につきやすいスローガンのような目標とは全くなじまない。高校までの受験〈勉強〉になじんだ学生に、自ら考えることの面白さや考えるための手段という小さな種を芽吹かせ育むことが基礎教育の大きな目標であるとするならば、単発的な授業参観の実績以上に何よりもまず教室での教員の日常的な努力と工夫を重視したい。これについては、2.5.4を参照されたい。

### 2.5.3 部局内FD研修

#### ①第5回FD合宿研修会

日時：2014年9月4日（木）～5日（金）

場所：福井県立大学

4日：テーマ「教学IR」

「大学教育の質保障に向けた教学IRの開発」鳥居朋子（立命館大学）

「Fレックスにおける教学IRの取組」徳野淳子（福井県立大学）

「RQから始める大学教育改善（ワークショップ）」河井亨（立命館大学）

5日：テーマ「FレックスにおけるLMSの実践」

実践実例報告：田中洋一（仁愛女子短期大学）

富永 修（福井県立大学）

加藤優子（仁愛大学）

学術教養センターからの参加者：

4日…熊谷正・徳野淳子（報告者）・中村匡・松本涼・山川修、情報交換会…松本涼・山川修

5日…木村小夜・徳野淳子・松本涼・山川修

2日目「FレックスにおけるLMSの実践」に参加したが、パネラーによる初心者の活用事例が大変興味深く、新鮮な思いで聴くことが出来た。ツールとして様々なレベルでの活用方法があることを知り、自分なりに有効な使い方を考えてみたい、との感想を持った。

## ②2014年度Fレックスシンポジウム 初年次教育のあり方

日時：2014年10月11日（土）13:30～16:30

場所：仁愛大学

学術教養センターからは塚原典央センター長が「各校における初年次教育のあり方」について事例紹介を行い、県内大学・高等専門学校各代表5名中のひとりとして、パネルディスカッションに参加した。

## ③学術教養センター懇談会

日時：2015年1月28日（水）14:40～16:20

参加者：大武博・加藤まどか・亀田勝見・北村知之・木村小夜・熊谷正・黒田祐二・津村文彦・徳野淳子・中村匡・長岡亜生・浜本隆三・松本涼・山川修（14名）

主旨：導入ゼミ（前期必修科目）と語学教育についての事例報告と自由討論を通して、授業に関する教員相互の情報・意見交換を行い、授業改善へと結実させていくことを目的とする。関係教員の授業が同一時間帯に行われるため相互参観が不可能だが、教員の関心の最も高い授業でもあるため、これら二つを選んだ。

内容

### 1・導入ゼミの事例報告（黒田祐二）と意見交換

#### ・レポート指導について

形式・内容それぞれの面において望ましくないレポートの具体例を提示し、学生に問題点を指摘させる、という報告者の指導方法が関心を呼んだ（こうした共通課題を用意する一方で、各学生のレポートへの指導も併行して行われているとのことである）。

これについては、実際の学生のレポートを例示する方が効果的かも知れない、との意見もあった。また、レポートの基本作法（引用・参考文献の書き方、注のつけかた、文献リスト）についてはどの程度指導が必要か、といった議論もなされた。

#### ・プレゼン指導について

ゼミでの発表に対する他の受講者の自発的反応は少ないため、評価シートを用いたり指名したりといった方法でリアクションを促す、とのことであった。大部分のゼミが同じような状況のようである。

また、プレゼンの形式は、パワーポイント使用の有無も含めてある程度自由にさせる方がよい（演劇的な発表などユニークなものも出てきたとのこと）、あるいは方法を複数提示して選択させてもよいのではないか、などの意見が出された。

なお、発表時の様子をビデオに撮る方法が本人にとっては最も省みやすいであろうし、試してみたい、という意向が、報告者からも示された。

- ・全体にわたって

報告者が学習項目と要素について一定の基準と枠組みを定めて授業を構成していることに、複数の参加者は注目した。指導内容の範囲について教員の中である程度統一見解を持ち、またそれを支えるような共通のテキストがあればよいかもしれない、ただ、それが無い現在、せめて共有すべき参考書リストがあればよいだろう、他の教員の授業方法や使用するプリントなども相互に閲覧できるよう、F レックスなどを活用すればよいのではないか、といった提案がなされた。

必修科目（抽選によるゼミ決定）であるため、素材に対する学生のモチベーションに差がある点をどうクリアするか。まずはゼミ（ひいては大学）という場に慣れ、リラックスして自由に発言できる雰囲気作りも、内容に関心を持ってもらう前提として重要、との指摘もあった。

レポート・発表の指導について、内容と形式の重視の比率については、以前から継続的に話題に上っている。そろそろある程度の指標を定める段階が来ているのかも知れない。一方で、各ゼミのレーダー・チャート（指導の重点度）をオリエンテーション時に提示するという、昨年出された案も想起される場所である。しかしそれ以前に、学生がシラバスをどの程度読んでゼミを選択しているか、といった問題もあり、課題解決に向けては一層知恵を出し合っていく必要があるだろう。

## 2. 英語授業の事例報告（浜本隆三）と意見交換

- ・レポート作成について

報告者は、A4 2枚程度の英文レポートの書き方・形式上の注意も指導しているとのことであった。これに対し、そこまで長いものは指導していない、形式以前の段階、という他の英語教員の反応もあった。

- ・TOEIC 対策

限られた授業回数でもあるので、勉強の動機づけともなるよう、効率的に点を取らせるための攻略法的な指導も行っている。これに対し、英語教育として適切か、むしろⅡで行うべき内容なのではないか、そもそも英語力とは何か、といった意見も出された。

- ・全体にわたって

大学での英語教育は、中高の英語教育と現実の英語の世界との橋渡しをすることである、と報告者は位置づけている。その一方で、専門科目の予習が求められる学生に対してどの程度宿題で負荷をかけるべきかについては思案するところで、まずは教室での時間を有意義に過ごしてほしい、英語力よりもむしろ努力を評価したい、とも考えている。こうした一種のディレンマからは、語学にきわめて意欲のある学生と必ずしもそうでない学生の双方にいかに対応すればよいのか、という課題も浮き彫りにされた。

総じて、導入ゼミと同様、英語科でも授業についての共通理解や模索が必要である、能力別クラス編成とした以上、レベルに応じた教材選択のさらなる工夫や情報交換の必要がある、との意見が英語教員より出された。

以上、前年度懇談会で出された問題点の積み残しも顕在化してきているため、継続的に懇談会を開き、情報を共有し、方向性を打ち出していく必要がある。他部局の協力教員の報告

なども取り入れ、来年度以降の授業改善に臨みたい。

#### 2.5.4 授業改善についての課題と展望

昨年度に続き、授業改善に向けての各教員の工夫・取り組みと課題・展望を報告する（五十音順）。

石原一成

講義・実技を問わず、受講生は学習活動の記録を行い、教員がコメント・アドバイスを記入しフィードバックを行い、双方向授業の基礎づくりを行っている。また、大学による授業アンケートとは別に、自身の授業のねらいとしている、

- ・自己管理に資する基礎的な知識の習得や態度の育成
- ・他者とのコミュニケーションを通じて、リーダーシップの発揮、問題解決等の能力
- ・就業力（信頼関係構築力や共同行動力など）の育成につながるスキルの獲得などについての調査を行い、授業改善のための資料としている。

大武 博

インターネット等を利用して、生きた英語素材を教材として利用することで、学生の興味・関心を喚起している。専攻分野に近い領域の素材を利用することで、学術目的に叶った英語力を涵養することにも配慮している。

加藤まどか

今年度は導入ゼミ・教養ゼミにおいて、学生が自分のテーマを決めて主題を考えるという過程を重視して授業を行った。ゼミで取り上げるテーマについて教員が概略を説明した後、学生達に、自分で「問い」を立て、それを展開することで「問い」を深めていくという作業を行ってもらった。

主題を考える過程に時間をかけたことで、問題を掘り下げた良い報告をする学生が現れたが、全員がそうだというわけではないので、来年度以降は、その点についてやり方を工夫する必要があると考えている。

亀田勝見

〈中国語〉

昨年実施した留学生との交流授業について、本年度はさらに手を加え、多くの留学生を迎えて充実した授業を実施できた。来年度も今回の成功を再現・発展させていきたい。

ここ二年ほど成立しなかったLCAP（中国語短期語学留学）について、自分のクラスの学生も含まれる5名の応募があり、今年夏は高雄に派遣できることとなったのも大きな成果である。

授業の方針や手法については例年どおりである。次年度も、いかに復習を習慣づけるかに留意し、小テストや課題の与え方を工夫するとともに、発音のみならず、ピンイン表記修得のためのさらなる工夫を考えていく。

〈導入ゼミ〉

導入教育的要素の修得については、昨年度以上の効果を得ることができ、学生のスキル向上はある程度達成できた。しかし、積極的な学問的活動につなげるところまではいかなかった。その意味で、成果も課題も昨年度とほぼ同様である。今後は学生達の積極的な活動を促すための工夫に、さらに重点をおきたい。

〈学術ゼミ〉

今年度は道教の伝記資料を読み進め、漢文訓読能力の向上と道教思想への理解はもちろん、背景となる古代中国の地理や歴史をも含めた総合的な素養の修得に心掛けた。ただ今年度は中国・台湾の留学生の受講が多く、漢文訓読能力の育成という面ではやや支障があった。

次年度は、従来の資料を継続して読み進めていくことに加え、海外研修をも取り入れた授業に挑戦する。新しい試みなので、先達の助言を得て実りのある授業にしていきたい。

〈講義科目〉

小浜キャンパスで台湾の文化と歴史について講義を行った。対象学生のことも考慮し、視聴覚教材を効果的に利用して、学生達に内容を理解してもらうことができたと考える。次年度は再び福井キャンパスで東洋思想の講義を行うが、引き続き効果的な教材の利用に努め、興味を失いがちな分野の話に耳を傾けさせたい。

菊沢正裕

〈毎年実施し、効果があるとして実施していること〉

- ・100人規模の大講義に対しては大福帳によって授業の内容の理解度や関心度を調査し、毎授業でフィードバックをかけている。
- ・複数回のレポート、筆記試験、大福帳など多様な形で成績を評価している。
- ・本学学生用に執筆した教科書を利用するか、LMSに講義資料を配備している。
- ・全科目にLMSを適用し、レポートや試験後1週間以内に学生が結果を閲覧できるようにしている。

〈2014年度の問題と対応策〉

- ・情報基礎演習は、受講者の入学時のICT能力格差への対応、情報特論Aは受講生を増やす必要、情報処理A（経済学部・看護福祉学部向）の前後期の受講数バランスの悪さ（人数が40名を超えるとドロップアウト率が高く成績も悪い）による問題。

その対応策として、情報教育教員および学教センターカリキュラム委員会で制度改正を行った。その結果、情報教育の必修科目を選択必修科目とし、その中で情報特論Aを情報科学Ⅱに、情報処理Aを情報処理基礎演習として衣替える。

- ・導入ゼミ（環境学習）に第2希望の受講生が5名（3分の1）入り、関心と意欲を高める努力をしたが大きな成果は見られなかった。対応策として、タイトルを「これからの環境教育」とし、内容を時代を反映したESD(持続可能な開発のための教育)に変更、またそれに呼応する教養ゼミ（創造農村）を新たに開講する。環境論と合せて環境教育の体系化を図るとともに、ESD思考を強化する。
- ・環境論は社会情勢に合わせた内容として昨年改善し、現在問題ないと考えている。

木村小夜

〈講義科目〉

・中小講義室規模の講義であったため、初歩的な指名発問を頻繁に行い、講義に緊張感を持たせると同時に、理解度を測りながら授業を進めた。

・授業内容に即して二百字課題を数回課し、次回で紹介して授業に組み込む形を継続。頻出する漢字の誤記、表現技法も指摘した。但し、やや遊びの要素を加えた方が学生の状況がよく見えるのでは、と考える。

・板書事項は事前に十分吟味し、これをそのまま写してもある程度理解可能となるものに変更した。が、主体的にノートをとる学生もおり、要求水準を徒らに下げるべきではない。なおもプリント内容や書き込み部分と板書事項の加減に工夫を要する。

・文学概論では多様な作品受容を知ってもらうために、ゲストスピーカーを招き、二作品を朗読してもらった。自身の読み方と朗読者の解釈の違いを感じ取った学生が多数おり、有意義な時間となった。こうした企画に教材費が使えることは、大変ありがたい。

〈導入ゼミ・教養ゼミ〉

・昨年度までのやや詰めこみがちなありかたを省み、大学という環境に慣れてもらうこと、肩の力を抜いて自由に考え話せる雰囲気作り、この二つをとりわけ導入ゼミでは重視した。開講間もない段階でアイスブレイクの手法をいくつか試みたところ、かなり効果があった。

・黙しがちの学生に対して教員が一方向的に話しかける状況を少なくし、適度にリラックスしてもらうために、2～3人で課題をめぐってやりとりさせる自由時間を設けた。

・時間と人数の関係でグループ発表とせざるを得ない分、希望する対象作品・作家・ジャンルは個別に挙げさせた上でマッチングを行った。

・導入ゼミでは、発表に対する相互評価（参加者が評価シート提出）と発表者へのフィードバック（無記名に作り直して渡す）を試みた。こうした些細なしかけが意外に学生の主体的な参加や相互の関心を促すことを知った。

・無意味な文献引き写しを避けるため、自ら考えさせるレポート課題を出す。しかし他方、調べて書くレポート形式の指導（注・引用方法・文献明記等）をするので、そこに乖離が生じる。初年次にとって適当な課題とは何か、あらためて考えたい。

熊谷 正

講義中、（なるべく）学生に対して怒ったり、叱ったりしないようにしている。後から、よく考えてみると、何らかの『それ以外の原因』が、学生にあったり、また、時には、自分にあったりすることに気づいて、後悔してしまうので。

講義の始まる30分前に教室に行って、環境整備をし、あとは、学生の様子を観る。

たった1週間会わなかっただけで、これ程一人一人が変わるものか、と驚きの連続である。

そして、『教室の、その日の「雰囲気」』を掴み、当日の講義の中身をその場で再度組み立てたり、組み替えたりする。

黒田祐二

## 1. 工夫した点

〈講義〉

・学生の理解度が高まるように、平易な言葉での説明、映像の使用、穴埋め式の講義ノートの作成・配布を行った

- ・学生が主体的に考えて学ぶことができるように、ディスカッションを複数回設けた。
- ・学生とのやりとりが深まるように、リアクションペーパーを1枚の用紙にして提出・返却を繰り返した。

#### 〈導入ゼミ〉

- ・学生自身が主体的に考えて学習できるように、レポートの見本を提示して学生に良い点・悪い点を考えさせるなどを行った
- ・学習内容がしっかり身につくように、実習後のフィードバックをできるだけしっかり行った

## 2. 反省点

#### 〈講義〉

- ・同じ講義内容でも、話し方や話しの持っていく方によって学生の興味関心や理解度はかなり違って来る。これらの点で改善すべきところがある。話す時にメリハリをつける、重要な箇所を強調して伝える、前後のつながりをより明確化するなど、今後努めたい
- ・リアクションペーパーに質問や感想を書く学生と書かない学生がはっきりと分かれる。それらを書こうとする意欲を引き出せるようにしたい

#### 〈導入ゼミ〉

- ・学習内容への興味以前に授業そのものへの参加意欲が高いと学習効果も高まるであろう。学生が授業に出たいと思えるような工夫（学生同士の交流が増えるようにする、授業者と学生とのコミュニケーションを増やす、雰囲気作りなど）がより必要だと感じている
- ・レポートやプレゼンのテーマの設定の仕方によってその内容がかなり異なる（良くも悪くもなる）。よいテーマ設定につながるような働きかけを考えていきたい

## 津村文彦

今年度は「学術ゼミ（地域研究）」（前期・後期）において、新たな試みを行った。

これまでは前期・後期ともに、文献講読を行ってきた。学期ごとに教員がテーマを設定し、書籍や論文など文献を提示したうえで、学生が文献を読んでレジュメにまとめて報告し、それをめぐって全員でディスカッションを行うというやり方を取ってきた。文献講読としてはある程度の教育効果があっただろうし、授業評価においても肯定的な回答を得ていたが、せっかく「地域研究」と題したゼミであるので、実際に地域に出て学ぶという新たな方法を模索することにした。また2014年度より、本学の「ゼミ等海外活動支援補助金」制度が始まったため、海外研修を行う際の学生の負担が多少とも緩和される見通しが立ったことも、新たな試みの後押しとなった。

海外研修をゼミ教育の中心に置くためには、研修の事前学習と事後学習が不可欠である。そのため、今年度から、「学術ゼミ（地域研究）」は前期と後期を両方受講することを原則として、シラバスに記載した。「学術ゼミ」は本来通年の受講を義務づける性格の授業ではないが、事前学習-実地研修-事後学習というサイクルを考えるなら、やむを得ない。結果的に前期の受講生は12名、実地研修への参加は11名、後期の受講者は11名と、こちらの見通しど

おりとなった。

海外研修のテーマはもちろん、航空券やホテルの手配なども、すべて学生が作業を進めることで、他人に手配された海外旅行にならないよう配慮した。また、訪問予定の国立象保護センターでの学習を効果的に進めるため、多くの文献を講読することで、タイの文化・歴史をめぐって事前に理解を深めた。

海外研修では、タイ王国ランパーン県にて、タイ国立象保護センターでの象使いキャンプへの参加、また村落でのホームステイの二つを軸に、タイの農村部での生活を实地に体感しながら学ぶことを行った。村落体験では、国立タマサート大学ランパーン校の協力のもと、タイ人学生がバディとして日本人学生2人ごとに付いて補助を行ってくれたことも、コミュニケーションを図るうえで効果的であったと思われる。

事後学習としては、公開講座「ケンダイ・ワールド・ツアー」の一枠を使って、海外研修の報告を学生が行った。一般の人に向けての報告であるため、緊張感をもって準備、発表を行うことができた。また海外研修の成果を形に残すため、フォトブックの形式での報告書を作成した。

初年度の試みとしては、まずまずの成果を得られたと思われる。来年度以降も、テーマを変えながら、継続して行っていきたい。

## 徳野淳子

以前から行っていることも含まれるが、以下に示す工夫をし、授業改善に努めている。

- ・他の先生方の授業方法を参考に、講義科目では、PowerPoint 資料を用い、これに対応した配布資料（空欄記入形式）を用いて、学生が講義に集中できるように工夫した。
- ・担当したすべての授業で学習管理システム（F レックス LMS）を用い、授業資料や参考資料の掲載、課題の提出等をそこで行うことで、授業外の学習を支援した。
- ・定期的に小テストを行い、学生の理解度を確認した。
- ・学生が作成したレポートや課題を用いてグループワークや相互評価を実施した。
- ・学生が理解しやすいように、適宜、写真や動画教材やソフトウェアなどの視覚教材を取り入れた。
- ・大人数の講義では、毎回授業の最後に用紙（大福帳）を配布し、学生の質問や要望に応じた。
- ・パソコンを利用した演習では、学生が細かな操作を理解できるよう、拡大鏡ソフトを用いるなどして説明方法を工夫した。
- ・前年度の授業評価アンケートの結果を参考に、授業方法を見直した。具体例として、前期に担当した情報基礎演習において、授業の進行速度を見直したところ、特に、パソコン操作に不慣れな学生から授業評価アンケートにおいて、好意的なコメントが寄せられた。
- ・複数の教員で担当する授業（情報基礎演習、情報科学）では教員間で授業内容に差が出ないよう、教科書やシラバスに即した内容になるよう心がけた。また、毎年前期の終わりに、情報基礎演習を担当する教員が集まり、意見交換を行っている。特に今年度は、近年の新入

生のコンピュータリテラシーの向上に対して、情報科目のカリキュラム改正を行うべく、複数回に渡って議論した。

長岡 亜生

〈英語 I (1 年次必修)〉

総合的な英語力をのばすことを目的とする授業であるが、とくに高校までの基本文法の復習、定着と語彙力増強をめざした補助教材をクラスごとに作成し、授業内で活用した。また学生が積極的に参加できるように、学生どうしの活動の時間を増やし、英語を口に出して言わせるアウトプットの機会ももたせるようにした。

〈英語 II (選択 1～4 年次)〉

それぞれの授業で教材として用いた映画、小説、エッセイ等の内容理解に必要な背景知識(たとえば英米詩、英国史、文化など)について、写真や図表を提示したり、補助資料を配布したりすることで、学生の理解を深め、知的好奇心を刺激するようにした。

浜本 隆三

〈英語 I〉

必修の講義として多くの学生に関わる講義内容になるよう、TOEIC 対策の講義を行った。講義では TOEIC テスト対策を独自にまとめたパワーポイント素材を用意して、わかりやすい講義を心がけた。また、授業時間中のみの学習に限らず、学生が自主的に英語学習を継続していくきっかけとなるような講義を心がけた。今後の課題としては、TOEIC の攻略という側面を強調するのではなく、英語の生涯学習ツールの一つとしての TOEIC 活用を促していけたらと考えている。

〈英語 II〉

学習したフレーズを応用した練習問題を課すことで、応用力を高めるよう心がけた。今後の課題としては、いかに教えるフレーズの数を増やしていけるか、という点がある。90分という講義時間を費やしていることを踏まえて、より有意義な時間になるよう講義内容を常に修正していく必要がある。

松本 涼

〈講義科目：西洋史／教養特講 F・G〉

・講義テーマに関連したビジュアル資料(映画・ドキュメンタリー・マンガなど)を授業の導入としてもちい、テーマへの関心を高めてから講義に入るという形式を重視した。アンケート等による学生の反応もよく、関心や理解度を高める効果があったと考えられる。一方、テーマによって手持ちのビジュアル資料の量や質に差があり、日頃から積極的に適切な素材を探す必要を感じた。とくに、学生にとって身近なマンガをテキストとして歴史的背景の考察を求める小レポートは、学生の歴史への関心を高めるのに有効だったが、適切な素材を見つけるのが難しい。

・現状では一方的な情報発信となっており、双方向性については改善が必要である。今年度は数回ごとのコメントシートの提出によって感想や疑問点を集め、授業時や F レックス LMS で回答したが、提出を任意にしたこともあり積極的な意見は少なかった。次年度は、コメン

トシートの提出を毎回課すことも検討する。

・今年度は準備不足で実現できなかったが、中世の羊皮紙写本の作成など、過去との距離を体感できるようなワークショップも採り入れてゆきたい。

〈導入ゼミ〉

・個々のレベルに応じた指導をめざし、文章読解についての小レポートや、レポート作成のための文献リストやアウトラインなどの提出をほぼ毎回課し、コメントを付してフィードバックした。段階的に能力の上昇が確認できる学生も多かったが、モチベーションにかなりの差がみられた。

・授業時には指名質問を頻繁におこなったが（自発的な発言はなかったため）、教師-学生の対話になってしまい、学生同士のコミュニケーションがほとんどなかった。この点については少人数授業のメリットが生かせていないため、次年度は文章読解にかんする議論などのグループワークも採り入れたい。

〈教養ゼミ〉

・庄子大亮『アトランティス・ミステリー』という新書をテキストとして、学生による要約発表と議論をおこなった。アトランティス伝説という通俗的に有名な対象を扱っているため、学生の関心も総じて高く、わかりやすい事例から歴史学の深層にせまる諸問題を考えることができた。ただ、これはテキストの力によるところが大きいいため、次年度以降もテキスト選出に工夫が必要である。

森 英樹

〈英語特論 IV B〉

少人数の上級レベルのコースであったことから、授業担当者の言語学研究と連動させながら教材選びと授業運営を行った。結果として、学期末には、受講生は緻密な英文読解力に加え、深い知識に裏づけられた柔軟な思考力と多様な視点を身につけた。受講生の知的好奇心を効果的に引き出すためには、語学教育においても、時流に染まらない少人数教育の実現が重要だと思われる。

山川 修

（全般的に）

・学生同士が相互作用を多くできるようにする

学生自身の学ぶ意欲を刺激する目的で、学生同士で、考えたことを話し合うグループワークや、学生が提出した課題を他の学生が読んで（見て）フィードバックをするといった活動を多く取り入れるようにしている。

・学習プロセスの中に振り返り（リフレクション）を取り入れる

自分が何を学んでいるかを明文化して意識することにより、学んだことの自身への定着率を高め、さらに次に学ぶことに興味を持たせるため、様々な振り返りの仕組みを授業の中に入れていく。具体的には、すべての授業で、授業後に数分で書くミニッツペーパー（といってもLMSやeポートフォリオで書かせているものもある）を実施し、毎回、自分が学んだことを文章にしてもらっている。また、前述のグループワークが可能な授業では、その中でも取り扱っており、レポート課題の中にも、この項目は入れてある。

- ・直観的な教材も利用する

理系の授業をすることが多く、その中で数式を扱う必要がでてくることもしばしばある。そういった際は、数式でも説明するが、直観的にわかるような図、グラフ、たとえ話、ビデオ等も利用して、数式がわからなくても、何を話しているかわかるという点を工夫している。

- ・可能であれば ICT システムを利用する

ICT システムを利用する目的は、手間をできるだけ少なくして、教員と学生、学生同士の相互作用を増やすことである。前述のミニッツペーパーにしても、すべて紙ベースで行っていると、その回収、配布、整理の手間が結構かかる。私の担当する授業では一つを除き、すべて、ICT システムを利用してミニッツペーパーを実施している。このときのメリットは手間を減らすだけでなく、一人の学生の質問と教員による回答が、他のすべての学生も閲覧可能になる点である。こういったことを紙ベースで実施しようとする、かなり手間がかかることは否めない。

### 3. 点検と課題（経済学部 新宮晋）

ファカルティ・ディベロップメントとは、文部科学省の最も包括的定義によれば、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる」とある。これに対し本学では、「授業評価」「授業公開」「研修」の3つを「組織的な取組」として行ってきた。中期計画もこれに沿って立てられているはずである。

そこで、第2期中期計画の折り返し点を迎える3年目終えるこの時期に、改めて今期の計画を見据えながら、本学FDについて点検し考えてみたい。

#### 3.1 授業評価について

本学の授業評価は、その期の授業についてのアンケートに、学期末に学生に無記名で答えさせる、という方法をとってきた。当初、きわめて多数であった質問項目を授業改善に関わるものに絞り込み、よりコンパクトにして今日に至る。

今年度の実績については各部局の項にゆだねるとして、「授業評価」についてこれまで指摘されてきたいくつかの点について、改めて整理しておく。

一つは、一部の科目を除き主に紙媒体で行われているのに代えてLMSが利用できないか、というのがあるが、これについては回収率の確保等からなかなか踏み切れない状況である。現状は手間がかかるが回収率の確保が優先されるべきであろうから、LMSの利用が合理的な理由から進むことがない限り、直ちには難しいことには変わらない。

次に、昨年度のこの項でも触れたが、学期末の実施では学期内にフィードバックできないことが難点としてしばしば挙げられてきた。これについては、特にコメント欄が重視されているようなので、教員が個別の判断で学期中にアンケートをとるなどして対応しているケースも多いようである。学期中のフィードバックを可能にする組織的な体制作りは、事務処理上の負担が過大になることを考えると非常に困難である。学生との間のコミュニケーション・ツールとして授業評価はそれなりに有効であると考えられるが、後でも述べるように成績など、こちらも重要な評価手段が基本的に期末になることを考えると、大枠は次期の授業改善を目指したツールとして考えるのが、今のところ最も現実的であると考えられる。ただ、既に小テスト・中間テストの実施やリアクション・ペーパーの利用など、個別には行われており、必要に応じた期中評価の可能性については、これらの実績と合わせて今後も議論が継続されることが期待される。

三つ目として、無記名であることに対する異論があることである。無記名であることで確かに一定程度無責任な評価がなされる可能性は否定できないにしても、匿名性をなくすことで評価に逆のバイアスがかかる可能性が出てくる。学生が成績評価とリンクされることを恐れることによるバイアスである。これらのことを考えると、いずれがよいか俄には断じがたい。これも引き続き議論を深めていく必要があるが、授業評価の信頼性はいずれにしてもこうしたバイアスの範囲内であることをきっちり確認しておくことには大事であると思われる。

最後に、以上のすべてと関連すると思われるが、「授業評価」という名称を改めて、授業改善の本来の目的が明白になる名称にすべきであるという指摘が海洋生物資源学部から出ていることを、ここに改めて記しておく。

### 3.2 授業公開について

授業公開は昨年度から、各部局が方針を示し、それぞれの特性に合わせた工夫をしながら行われている。これについては、各部局の該当項目を参照していただきたい。

授業公開についての学内コンセンサスとしては、授業改善に資することがひとまず了解されているように思われる。ただ、優先順位は部局によってはかなり違いがある。授業公開が積極的に行われていない部局は、それに代わる独自の授業改善の取り組みが活発である。例えば、生物資源学部では授業改善アンケート、看護福祉学部では領域毎の研修会開催、学教センターではオムニバス講義を利用した相互参観と授業改善アンケートなどが重視されている。定型化するとマンネリズムに陥りがちな FD 活動が、部局毎の工夫で臨機応変にさまざまな取り組みを生み出していることが、確認できる。

### 3.3 研修等について

今年度は、本学が F-レックス FD 研修の幹事校に当たり、そのためにチーム・メンバーや事務局スタッフに多大の協力を仰ぐこととなった。F-レックス FD チームの主導のもと幸い充実した内容の研修が開催され、本学の今後の組織的取り組みの課題も見えてきた。研修の詳細や F-レックス FD チームの活動については別項を参照していただくとして、初日の IR をめぐる事例報告とワークショップ、2日目の LMS 活用事例報告はいずれも参加者の授業改善に刺戟になったことが、感想から伺える。IR については、後にもう一度言及する。

海洋生物資源学部が主催し全学公開された研修「聴覚障害の理解を深めるために」は非常に充実した内容だった。海洋生物資源学部としては具体的な対応を契機とした研修実施だったわけだが、全学に開放していただいて情報共有できたことはありがたかった。今後身体的・精神的な障害をもつ学生にきちんと対応することの重要性を共通認識としてもてたこと、こうした学生に対する教学サポートについてさらに考える必要があることが了解できた。

中計の項目にある教員間懇談会が部局内研修として定着している。テーマを見ると、授業公開ほどには特殊的でなく、学外研修ほど一般性があるわけではない、おそらく教員間情報交換としては最も具体的で直接的な内容になっているように思われる。教員間コミュニケーションの方法としては、生物資源学部や学教センターのようなアンケートの公表による相互理解も同様で、教員間の相互刺戟に比較的結びつきやすい。これらの活動は、日々の授業改善を組織的な活動としてルーティンにこなすだけではない、教員各自の問題意識を反映したものとしてもっと評価されるべきであろう。

### 3.4 その他

授業改善は日進月歩であり、それは個々の教員の工夫という意味でも、部局ごとの取り組みという意味でもそうである。さらに学外からは、さまざまな授業方法や授業改善のツールが紹介され、いくつかは本学でも取り入れられようとしている。これらは実践の場で彫琢され、あるいは淘汰されて行くであろうし、本学の部局の性格や実情に合わせた試行錯誤の取り組みがなされることで、授業改善に資することが期待される。

その中で、今年度 F-レックス FD 研修のテーマにもなった IR に関して、本学では 2015 年度から教学 IR ワーキング・グループを立ち上げ、さまざまな試みを展開することになっている。教学 IR とは、学生への意識調査をベースに授業改善のヒント（改善点や課題）を導き出し、教学シス

テムの改善に資する根拠を組織的に提供しようとするものである。これによって、カリキュラムの改善や場合によっては学生への個別対応など、具体的な取り組みの種を拾い出すことができることが期待される。また、日頃印象論的に語られる学生気質や授業への姿勢に根拠を示すことや、教員の要求と学生の実態とのギャップを埋めることなども期待されている。

研修に参加して、教学 IR についてとりわけ重要と思われたのが、リサーチ・クエスチョン (RQ) を的確に設定することである。新しい「道具」は時として現場を無視して一人歩きしがちである。RQ が現場の重要性と無関係に設定されると、教員のモチベーションを下げることもなりかねないし、学生についての間違った認識を強化しかねない。逆に適切な RQ のもとに学生についての実態把握が適切に進めば、授業改善にも役立てられよう。個人情報収集という側面もあるので厳格かつ慎重な管理が求められる。

アクティブ・ラーニングも、しばしば言及される、講義でも演習でもない一種の授業方法である。さまざまな研究もなされ報告も数多く出されているが、広義には学生巻き込み型学習の一つと言えよう。昨年度、経済学部北島先生の公開授業はその一つであり、今年度英語ディベートとして行った外書講読の授業形態もその一つと言えよう。こうした授業形態は通常の講義よりも少なくとも学生の満足度が高く、その理由としては参加意識が得られることが大きいと思われる。ただ、英語ディベートについていえば、極めて限られた論点についての理解と思考の展開を促すのには効果的であるが、基本的な知識を欠いた空疎な立論や体系的な理解と無縁なその場しのぎの議論のやりとりに陥る場合があり、こうしたことを考えると、実効性のある授業方法とするには単独に考えるのではなく、カリキュラム全体に位置づけるなどの工夫が必要であると思われる。

第 2 期中計の今年度計画のうち、学生の理解度把握について最後に述べておく。小テストや中間テスト、リアクション・ペーパーによる理解度把握などは、すでに数多くの教員が個別に行っていることは、各部局のアンケートや授業公開報告からも見て取れる。こうしたきめ細かい対応は、授業評価の期末実施を補うものとして有効である。ただ、原則論として、やはり期末試験やレポートなど、一通り授業を行った後に行われる学生の理解度評価こそ授業改善の最も肝要な種であるはずである。確かにその期のうちに改善に生かすことはできないが、日々の積み重ねとして授業が成熟していくことを考えると、教員サイドの要求に学生が応えられているかを期末にはかり次期に生かすことが、学生の理解度を高めていく基本的な道筋であろう。一定の理解度に達しないものを再履修させて理解の改善を図るという原則が忘れられてはならないと考える。

## おわりに

今年度も、学習支援チーム代表の青海副学長にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。青海先生の寛大で前向きなスタンスのおかげで、本学 FD 活動が型通りのものにならず工夫と創意に満ちたものになっていると感じます。また、事務局サイドからは着任早々にもかかわらず的確にサポートしてくださった教育推進課の竹原さんに、心からお礼申し上げます。

ファカルティ・ディベロップメント報告書2014

---

発行年月 2015年3月

編集・発行 福井県立大学教育学習支援チーム